

大矢沢野田(1)遺跡

調査報告書

平成11年度

青森市教育委員会



大矢沢野田（1）遺跡調査範囲近景（北西から）



表館式土器

序

青森市には、幾多の遺跡があり、文化財に恵まれた地域であります。青森市南部の大矢沢地区は、緑多い八甲田山の裾野と、住宅地が相共存する地域であり、大矢沢野田（1）遺跡はその一角に所在しております。

この地に遊水地の造成と道路建設が計画され、予定地内に所在する本遺跡の取り扱いについて、関係機関との協議の結果、記録保存のための試掘調査及び発掘調査を実施することになりました。

本遺跡は、平成10年度、青森県教育委員会により調査が行われ、今から約30,000年前と13,000年前の埋没林を検出し、縄文時代の河川跡が確認されています。

今年度の当委員会による堤川広域基幹河川改修事業に先立つ試掘調査と、市道筒井幸畑団地線特殊改良事業に先立つ発掘調査の結果、縄文時代前期を主体とする遺跡であり、本市では検出例のみられない、今から約6,000年前の竪穴式住居跡を、また縄文時代前期中頃の遺物の捨て場等を検出しています。

これらの調査の結果を鑑み、遺跡の記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資するため、当委員会では平成12年度も調査を実施することといたしました。

本書は、今年度実施した試掘調査報告と、発掘調査概要を一冊にまとめたものです。本書が本遺跡の理解と、本市の歴史解明の一助となれば幸いと存じます。

最後となりましたが、本書を刊行できましたことは、ひとえに関係各機関・諸氏のご指導、ご助言によるものと深く感謝の意を表する次第であります。

平成12年3月

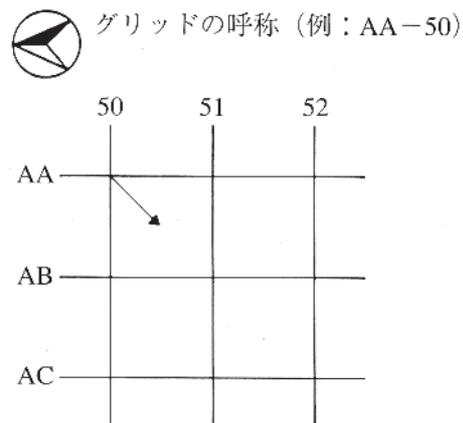
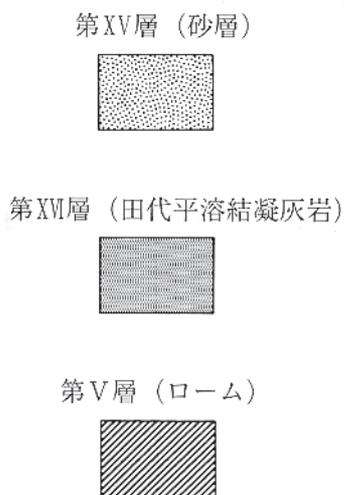
青森市教育委員会

教 育 長 池 田 敬

例 言

1. 本書は、青森市大字大矢沢字野田に所在する大矢沢野田（1）遺跡の平成11年度に実施した堤川広域基幹河川改修事業に係る試掘調査報告及び、市道筒井幸畑団地線特殊改良事業に係る発掘調査概要報告を所収したものである。試掘調査と本発掘調査という性格の異なる調査であるが、同一遺跡内の調査で両調査区が隣接し、相互に関連する遺構・遺物がみられることから、今年度の調査成果を記述する上で望ましいと考え、合本することにした。
2. 大矢沢野田（1）遺跡は、青森県遺跡台帳に遺跡番号01292として登録されている。
3. 本書の執筆・編集は青森市教育委員会が行い、設楽政健、沼宮内陽一郎が担当した。その執筆分担については、事業実施の概要、試掘調査報告を設楽が、遺跡の概要、発掘調査概要報告を沼宮内が行った。
4. 遺跡の概要の第3節については、青森県総合学校教育センター指導主事工藤 一彌氏に執筆依頼した。
5. 本報告書の土層注記については、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄1993）に準拠した。
6. 挿図の縮尺は各図ごとに示し、各種平面図の方位は磁北を示した。なお、写真図版の縮尺については、統一を図っていない。
7. 図版及び表番号は、一冊を通じて連続するものとし、「第1図」「第1表」としたが、依頼原稿については「図1」「表1」とした。
8. 出土遺物及び記録図面・写真関係資料は、現在、青森市教育委員会で保管している。
9. 引用・参考文献は巻末に収めた。
10. 発掘調査及び報告書の作成にあたって次の諸氏からご指導・ご教示を賜った。記して、感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）
百原新 木村勝彦 小笠原雅行 木村鐵次郎 小林達雄 三宅徹也 斎藤岳 斎藤正 中嶋友文 中村哲也 中村美杉 木村真明 佐野忠史

凡 例



目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
事業実施の概要	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	2
第3節 調査方法	3
第4節 調査経過	4
遺跡の概要	
第1節 遺跡の位置と地形	11
第2節 周辺の遺跡	12
第3節 遺跡周辺の地形と地質	15
第4節 遺跡の層序	18
大矢沢野田（1）遺跡試掘調査報告書	
第I章 調査成果	
第1節 検出遺構	23
第2節 河川跡	23
第3節 遺構外出土遺物	27
第II章 小結：遺跡の範囲について	31
写真図版	33
大矢沢野田（1）遺跡発掘調査概報	
第I章 調査成果の概要	37
第1節 南側の検出遺構と出土遺物	38
第2節 平野部からの検出遺構と出土遺物	40
第II章 小 結	53
写真図版	54
ま と め	56
引用参考文献	

事業実施の概要

第1節 調査に至る経過

本遺跡は、平成10年度に青森土木事務所による堤川広域基幹河川改修事業に伴う横内川多目的遊水地建設工事に伴い、発見・登録された遺跡である。

当初、計画予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地は確認されていなかったため、遊水地建設工事及び、青森市建設部道路課による市道筒井幸畑団地線特殊改良事業一種（特定）事業が計画されていたが、平成10年4月9日付け青土木第83号で青森土木事務所より、遊水地建設工事中に埋蔵文化財包蔵地を発見した旨の届があり、現地踏査を経て遺跡範囲が確定され、青森県教育委員会によって大矢沢野田（1）遺跡として新規に登録された（青森県遺跡台帳番号01292）。

平成10年度には青森県教育委員会による発掘調査・範囲確認調査が行われており、縄文時代前期中頃の遺物を包含する河川跡、縄文時代の土坑5基、旧石器時代～縄文時代前期に相当する埋没林が検出されたほか、縄文時代早期の貝殻文土器、縄文時代前期初頭の早稲田6類、表館式土器が少量出土している。

そして、今年度、青森土木事務所が計画する遊水地築堤工事予定地の一部と大矢沢野田（1）遺跡の範囲が重複するため、その取り扱いについて青森土木事務所と当委員会が協議した結果、遺跡の規模・性格、来年度以降の調査の必要性等を把握するため、試掘調査を行うという結論に至った。平成11年5月12日付け青土木第194号で青森土木事務所より当委員会に対して試掘調査の依頼がなされ、平成11年5月19日付青市教委社第262号で、これを受諾する旨の回答をし、試掘調査を実施した。

また、遊水地築堤工事予定地に隣接する工事用道路において、青森市建設部道路課（以下、市道路課）が計画する市道筒井幸畑団地線特殊改良事業一種（特定）事業について、計画地と大矢沢野田（1）遺跡の範囲が重複するため、その取り扱いについて、市道路課と当委員会が協議を重ねた結果、事業計画の変更と見直しは困難であることから、記録保存のための発掘調査を行うという結論に至った。平成11年5月6日付け青市道第69号で市道路課より当委員会に対して発掘調査の依頼がなされ、平成11年5月10日付け青市教委社第234号において、これを受諾する旨の回答をし、発掘調査を実施することとした。

市道路課委託の発掘調査については、当初、調査対象面積12,000m²のうち、既存の工事用道路を含め、約6,000m²を調査する予定であったが、道路課、青森土木事務所、当委員会の3者で協議した結果、工事用道路に隣接して行われている青森土木事務所所管の遊水地建設に伴う工事車両、現道に隣接する農道に出入りする農耕車の通行を考慮すると、調査対象範囲内にあたる工事用道路を調査することは困難であるという結論に達したことから、今年度の発掘調査について工事用道路部分の調査を行わず、工事用道路の東側の調査実施可能な部分について行うこととした。

第2節 調査要項

1. 調査の目的

試掘調査 堤川広域基幹河川改修事業に先立ち、予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の試掘調査を実施し、遺跡の性格、規模、範囲等を確認する。

発掘調査 市道筒井幸畑団地線特殊改良事業一種（特定）事業に先立ち、予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

2. 遺跡名及び所在地

大矢沢野田（1）遺跡（おおやさわのだかつこいち）

青森市大字大矢沢字野田ほか

3. 調査実施期間

試掘調査 平成11年6月14日～平成11年7月9日

発掘調査 平成11年6月14日～平成11年9月30日

4. 調査面積

試掘調査 250m²（調査対象面積 2,000m²）

発掘調査 1,000m²（調査対象面積 6,000m²）

5. 調査委託者

青森土木事務所

青森市建設部

6. 調査受諾者

青森市教育委員会

7. 調査担当機関

青森市教育委員会生涯学習部社会教育課埋蔵文化財対策室

8. 調査指導機関

青森県教育庁文化課

9. 調査体制

調査指導員 村 越 潔（考古学）

調査員 藤 沼 邦 彦（ 〃 ）

〃 市 川 金 丸（ 〃 ）

〃 工 藤 一 彌（地質学）

調査協力員 桜 田 亮 栄

千 葉 操

調査事務局 青森市教育委員会

教 育 長	池 田 敬
生涯学習部長	中 西 秀 吉
生涯学習部次長	小 山 内 博
社会教育課長	間 山 義 弘
埋蔵文化財対策室長	遠 藤 正 夫
室 長 補 佐	蝦 名 淳 一
主 査	堀 谷 久 子
〃	田 澤 淳 逸
主 事	小 野 貴 之
〃	木 村 淳 一
〃	児 玉 大 成
〃	沼宮内 陽一郎 (調査担当)
〃	設 楽 政 健 (調査担当)

第3節 調査方法

調査区の設定にあたっては、道路部分の工事用中心杭No.0とNo.1を結ぶ南北方向の直線とこれに直交する東西方向の直線を、それぞれ長軸方向と短軸方向の基準線とする4m×4mのグリッドを設定し、工事用中心杭No.0を起点として、南に1、2、3、の順に算用数字を、東へZ、Y、X、西へAB、AC、AD、の順にアルファベットを付し、各グリッドの呼称はアルファベットと算用数字の組み合わせで示した。グリッド南北線の基準線と磁北との偏差は西偏5°である。なお、このグリッドは平成10年度に実施された青森県教育委員会による発掘調査におけるグリッドとは一致しない。

測量原点については青森土木事務所敷地内に所在する原点10.498mを基準とし、延長約600mの調査区に対応するため、3カ所の測量原点を設置した後、調査の進捗に応じて適宜追加していった。

なお、このグリッド配置及び呼称・測量原点は、試掘調査と発掘調査で共通するものである。

遺物は、遺構内、遺構外出土遺物ともに各層ごとに一括し、必要に応じて番号を付して取り上げた。

実測は、簡易遣り方測量と平板測量を併用して行い、実測図の縮尺は、20分の1を原則とし、必要に応じて、10分の1、40分の1を採用した。

写真撮影にあたっては、35mmのモノクローム、カラーリバーサルフィルムの各フィルムを併用し、調査の進展に伴い必要に応じて撮影を行った。

試掘調査対象面積は遊水地の法面上部の平坦面（平均幅約4m）、約2,000m²であった。この法面は、切土によって造成されており、地表面観察の結果、法面上部から法面下部（平均高2m）のさらに下層まで、泥炭層が連続している状況が確認できた。したがって、調査対象範囲である法面上部の平坦面を掘り下げて遺構を確認するためには、深さ3m以上の掘り下げが必要となることから、作業上極めて危険であると考えられた。そこで、委託者側の了承を得て、法面が落ちきった部分の調査対象範囲外に任意でテストトレンチを入れ、その状況を考慮したうえで、遺構・遺物確認用のトレンチを設置して調査を行った。

発掘調査については、土坑等の精査は二分法で、遺物集中ブロックについては土層観察用のベルトを

設け一括して遺物を取り上げた。実測は簡易遣り方測量と平板測量を併用して行い、縮尺は20分の1を原則としたが、必要に応じて適宜使い分けた。

第3節 調査の経過

6月14日 試掘調査・発掘調査ともに調査を開始した。

6月中旬～7月初旬

青森土木事務所委託の試掘調査区域については、調査対象となる遊水地築堤工事部分（法面頂部）の堆積状況を確認するため、法面及び法面頂部の草刈り、ジョレンがけを行った。その結果、法面の土層は、調査対象区域の北端からグリッドライン60付近まで、既に造成済の遊水池高水敷のレベルよりもさらに下へと泥炭層がつづいている状況が確認できたため、調査対象区域である法面頂部だけを掘り下げるのは、作業上危険であると考えられた。そこで、法面頂部と法面の落ちきったところに、土層の堆積状況を確認した後、地点を選定しテストトレンチを入れたところ、AD-24グリッド付近において、高水敷のレベルより下の第Ⅻ層上部で中礫浮石層を確認でき、その下層の黒色のシルト土層から縄文時代前期初頭の土器片が1片出土した。その後、土層観察の結果に鑑み、地点を選定し、重機によって法面ごと掘削してトレンチをいれた。トレンチの番号は、調査区北端からトレンチ1とし、トレンチ13まで設定した。

一方、道路課委託の発掘調査区域については、6月下旬にグリッドライン125～138の約165㎡を重機で掘り下げ、碎石、盛り土を除去し、ジョレンがけ・遺構確認を行ったが、遺構、遺物はほとんど検出できなかった。調査開始前は、平坦面が115ライン付近まで続いていたが、碎石除去時に0-120グリッド付近を重機により掘り下げたところ、5～6m掘り下げてもなお地山が確認できない程、碎石が盛られていたことから、何かしらの造成を受けていたことも想定されるため、120ライン付近から急斜面が下りきる110ラインまでの原地形は不明である。

7月上旬～7月末

試掘調査区域については、重機によって開けたトレンチの精査を行った。その結果、トレンチ2南側の断面において基本層序第Ⅻ層上部より掘り込まれる、漸移層の無い落ち込みを確認した。この落ち込みは第Ⅻ層から第Ⅹ層まで掘り込まれており、落ち込みの底面はピンポールが刺さらないほど堅緻であり、落ち込みの上層から前期初頭の土器片、石器が出土した。全体は検出できなかったが、隅丸長方形を呈する縄文時代の前期初頭の竪穴式住居跡と断定した。また、トレンチ2のすぐ南側のトレンチ8を掘り下げたところ、第Ⅻ、第Ⅹ層より、前期初頭の表館式土器がまとまって出土した。

また、調査区の南端の法面から、河川跡の断面を検出し、河川跡の最下層にあたる第12層から、縄文時代前期中頃の円筒下層a式、b式土器が多量に出土した。

試掘調査は、7月中旬をもって調査を終了した。

発掘調査区域では、墓所北側の調査範囲内において遺構は検出しなかったが、調査面積が狭く、さらに墓所まで約20mの距離が残っていたため、墓所及び現道下部の今後の調査の必要性について結論を出すことが困難であるので、調査対象範囲を南側へ約170㎡広げ、重機による掘り下げを行ったところ、縄文時代に帰属すると考えられるフラスコ状土坑とTピットを各1基検出した。遺物は主に縄文時代前

期の円筒下層式土器・中期末から後期の土器片が段ボールで1箱弱出土した。

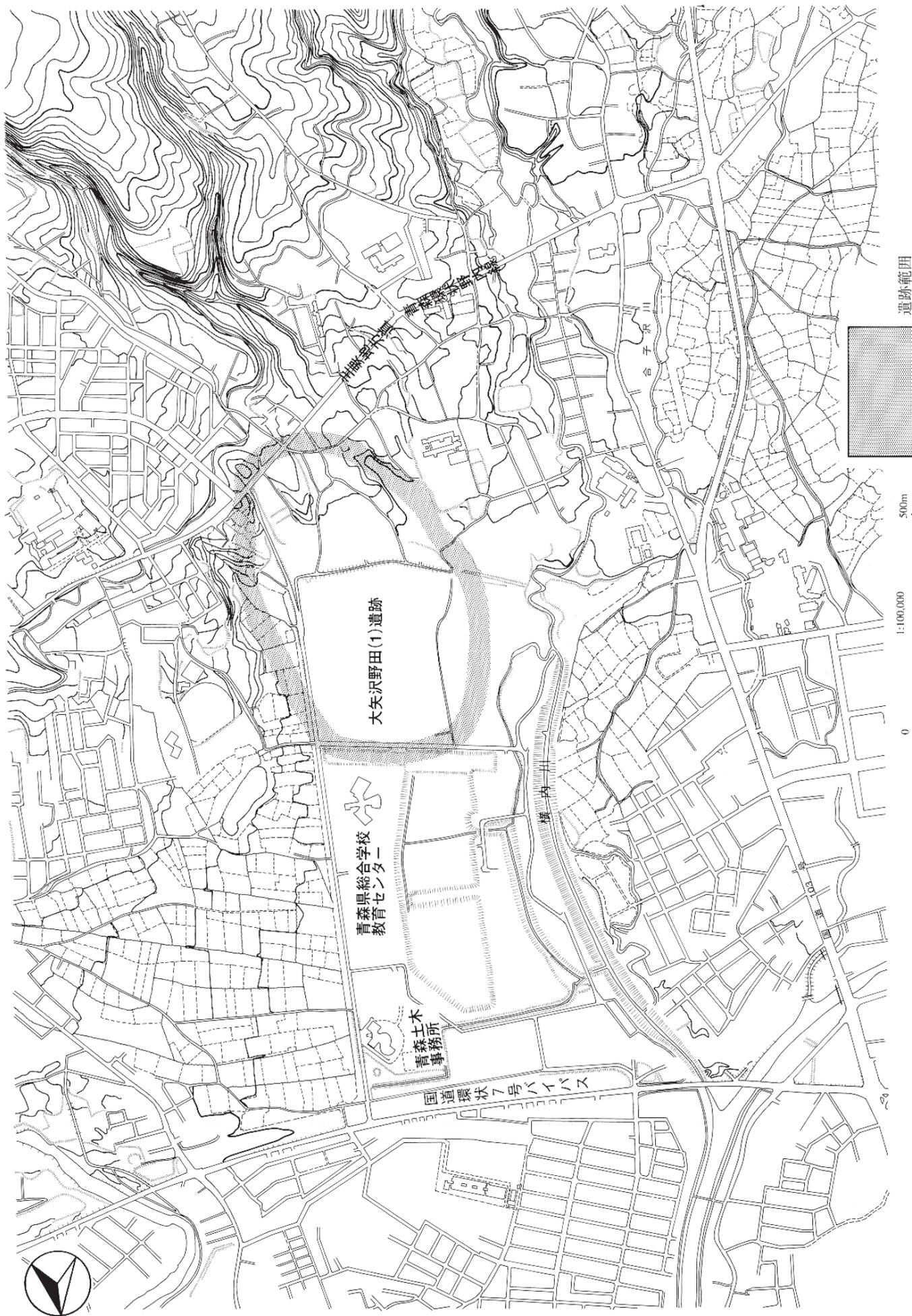
8月初旬～9月下旬

発掘調査区域では、工事用道路東側の調査を開始した。グリッドライン87～91から、盛土下の黒色土から円筒下層a式、b式土器が大量に出土する当該時期の遺物集中ブロック（捨て場）を検出し、精査を行った。

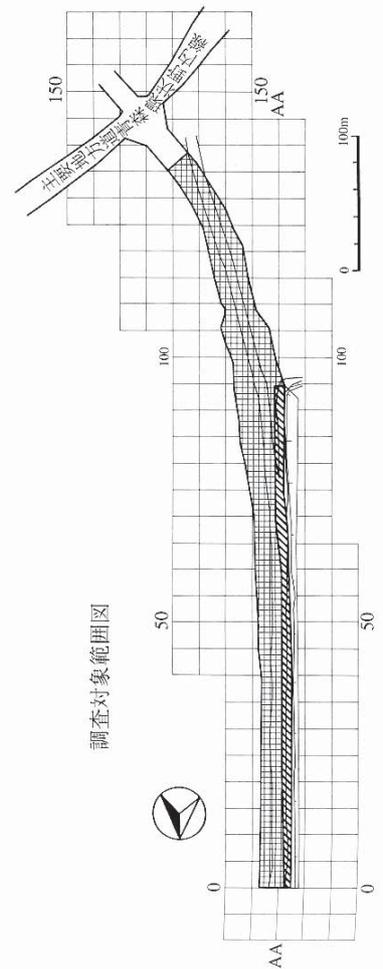
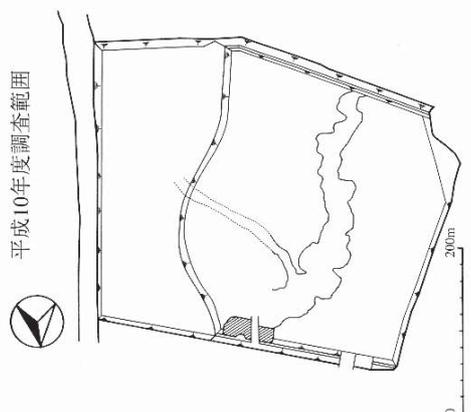
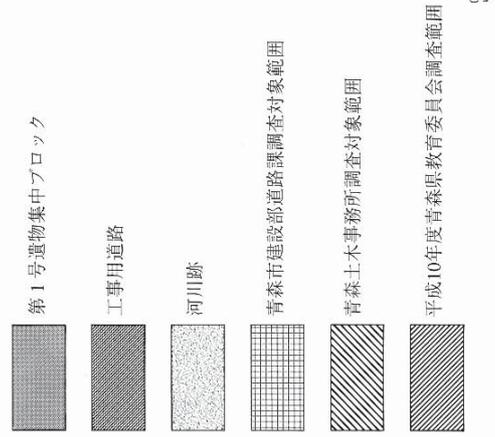
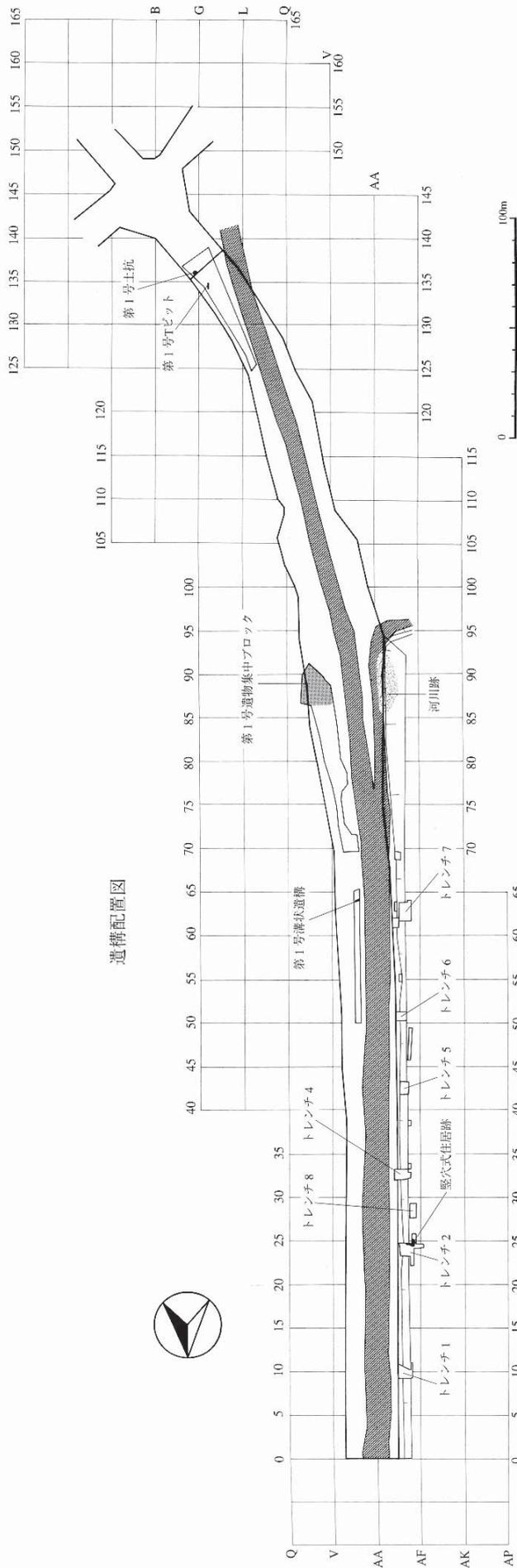
グリッドライン78～86にかけては、人力で掘り下げを行ったところ、表土直下が地山（基本層序第XVII層）となっており、攪乱を受けていた。グリッドライン50～66については道路西側の試掘調査区域と同様に泥炭層が厚く堆積し、また調査可能範囲である現道から用水路までの幅が2～3mと狭かったことから、人力で全面的に掘り下げることが不可能であると考えられたため、部分的にトレンチを設定して重機による掘り下げを行い、遺構・遺物の確認を行った。結果、X-64グリッド付近で基本層序第XIV層より掘り込まれる溝状遺構を1基確認した以外には、遺構・遺物はほとんど検出できなかった。グリッドライン50以北は、重機によって掘り下げても、地山を確認できないほど泥炭層が厚く堆積し、作業上危険であると考えられたため、調査を行わなかった。

9月24日、青森土木事務所会議室において、発掘調査会議を開催し、今年度の調査成果を踏まえ、来年度以降の調査必要箇所等について検討した。

9月30日、現地での全作業を終え、発掘調査を終了した。



第1図 本遺跡範囲と周辺の地形



※ (平成10年度調査範囲は、青森県埋蔵文化財調査報告書第270集「大矢沢野田(1)遺跡発掘調査報告書」第2図より引用、当委員会調査区を加筆)

第2図 調査対象範囲・遺構配置図

遺 跡 の 概 要

第1節 遺跡の位置と地形

青森市は、北を陸奥湾に面し三角形を呈する青森平野と、これを取り囲む様に東～南～西側に広がる丘陵地により成っている。

青森平野は、青森市街地南側を通る国道環状7号バイパスにより、北側の市街地と南側の水田及び原野が広がる二つの地域に大きく分けることができ、青森市南側に広がる八甲田山に水源を有する堤川・駒込川等の河川が平野内部を南北に流れている。大矢沢野田(1)遺跡は、北を環状7号バイパス、東西を駒込川と堤川支流の横内川に挟まれた田圃・原野が広がる地域と、八甲田山系の丘陵地縁辺部が接する付近に位置し、標高約10～28mに位置している。

遺跡は四方をそれぞれ住宅術に囲まれており、北側は遺跡範囲から約1kmの距離を置き筒井八ッ橋地区、南側は大矢沢・野尻・横内地区等と近接している。東側は、水田を挟んで500m弱程の距離をおき大矢沢地区が所在しており、西側は横内川を挟んで妙見町会等が広がっている。

遺跡周辺の地形は、北東～北～西側は標高差の少ない平坦な地形が広がる。遺跡東西の住宅地域内にも等高線が点在し、かつては僅かな標高差のある地形であったと思われるが、現在では宅地化が著しいことから、かつての地形を窺うことは困難である。南側に約500m離れると、等高線の間隔の狭い丘陵が広がっているが、青森平野と隣接する付近では緩やかな傾斜であり、遺跡と隣接する大矢沢・野尻地区では僅かに北傾する非常に緩やかな斜面が広がっている。

南側～東側にかけても住宅を始めとする多くの建築物が築造されるが、遺跡範囲から100m程東側には標高約12～16mの微丘陵が存在し、現在は雑木林となっている。

遺跡内は、地形的には沖積地である平坦部分と本市南部に広がる八甲田山系の丘陵地縁辺部の二つの地形に大別することができる。

遺跡範囲内の平坦部分は現在ほとんどが横内川多目的遊水地建設工事により、約3～6mの深さで掘削されている。平坦部分では、丘陵地縁辺部と接する一帯が現地形を留める箇所であり、標高12～14mの水田及び畑地が大部分を占める。

遺跡範囲南側の丘陵地縁辺部は、宅地化される一帯では比高差の少ない微丘陵地であり、調査区内南側では平坦な面も存在する緩斜面が大部分である。遺跡範囲南東側では、緩やかに北傾する斜面の東・西側が、最も高いところでは比高差10数m程の急斜面となる谷状の地形となっている。

今年度当委員会で行った試掘・発掘調査対象区域は、青森県総合学校教育センター南側から約400m平坦部分が続き、さらに南へ約200m丘陵地縁辺部へと上るといった、遺跡東端を南北に縦断する調査範囲であった。

試掘部分の調査対象範囲は、市道筒井幸畑団地線建設予定地に隣接する横内川多目的遊水地東側築堤部分、発掘調査は、市道筒井幸畑団地線建設予定地の現在工事用道路として使用されている部分と東側



写真1 調査対象範囲全景 (NW→)

に所在する田圃に挟まれた、ススキや灌木が繁茂する草地、主要地方道路青森環状野内線に隣接する、丘陵地部分を上りきった平坦面を調査対象範囲とした。

本遺跡は事業実施の概要第1節で述べた経緯を経て、平成10年度に発見・新規登録された遺跡である。堤川広域基幹河川改修事業に先立ち、平成10年度に青森県教育委員会により発掘調査が行われ、現在の遊水地北側の低水敷部分から縄文時代前期の土坑5基を検出し、縄文時代早期から前期の遺物が出土した。またこの調査により、縄文時代の河川跡及び、約3万年前と1万3千年前の埋没林を確認している（青森県教育委員会 1999）。

第2節 周辺の遺跡

本遺跡の南側に広がる台地上には、縄文時代から平安時代まで多くの遺跡が所在し、本市でこれまで確認されている周知の遺跡の多くが、この台地上で確認されている。これと比較し平野部で確認されている周知の遺跡数は少なく、本市西部においては、第四紀洪積世に形成された比較的標高の低い段丘面に周知の遺跡が多数確認されているが、本遺跡をはじめとする青森平野東部で確認されている周知の遺跡数は極端に少なくなる。

以下に本遺跡の周辺遺跡を、南側の丘陵地上に立地する遺跡と平野部分に立地する遺跡より抜粋し、その概略を記す。

丘陵地上の遺跡

本遺跡周辺の南側の丘陵地上縁辺には、阿部野遺跡・阿部野（2）遺跡・大矢沢里見（1）遺跡等が確認されており、昭和61年度に横内城跡が当委員会において調査され、竪穴遺構・土坑・溝状遺構等を検出し、青磁・白磁等の遺物も出土しているが、建築物の建設に先立つ基礎部分のみの発掘調査であり、調査面積が狭いことから本城館跡の全容を明らかにするには到っていない（青森市教育委員会 1987）。またこの丘陵地縁辺には、未調査のものがほとんどであるが本市東部から西部にかけて、野尻館・駒込館・戸崎館等多くの館・城館跡が確認されている（青森県教育委員会 1983）。

本遺跡から南方向へ約2kmに四ツ石遺跡が、さらに四ツ石遺跡から1km南下すると田茂木野遺跡が所在しており、四ツ石遺跡は1963年と1964年、田茂木野遺跡は1985年に発掘調査が実施されている。

四ツ石遺跡は標高約70～80mの北傾する緩斜面上に立地し、配石遺構を検出し、縄文時代後期前半の十腰内Ⅰ式土器をはじめとする遺物を出土している。田茂木野遺跡からは縄文時代中期末～後期前半と思われる竪穴式住居跡を検出し、縄文時代前期～晩期の遺物を出土している（青森市教育委員会 1965・1986）。

ほかにも付近に所在する縄文時代の遺跡としては、当委員会が平成5年度に調査を実施した横内・横内（2）遺跡が丘陵地縁辺のそれぞれ標高約26m、35～44mに所在し、円筒下層d₂式期の竪穴式住居跡等を検出している。また横内遺跡からは少量ではあるが、縄文時代早期前半の白浜式土器も出土している（青森市教育委員会 1995）。

本遺跡周辺において早期の土器が出土した遺跡として横内遺跡のほかに、本遺跡から北東へ約3kmの標高30～60mの平坦な台地上に所在する蛭沢遺跡から、蛭沢AⅡ式、物見台式土器等が出土している（青森市教育委員会 1979）。

本遺跡から南西へ約3kmの丘陵地縁辺部には新町野遺跡が、また、約3.5kmの丘陵上には野木遺跡が所

在しており、平成7年度から10年度の4か年にわたり青森県教育委員会、平成9年度からは当委員会によっても発掘調査が実施され、新町野遺跡からは円形周溝が、野木遺跡からは9世紀から10世紀の竪穴式住居跡や製鉄関連遺構等多数の遺構・遺物を検出した。いずれも当該期の生産構造及び社会構造の解明などに良好な資料を提示するものと思われる（青森県教育委員会 1998、青森市教育委員会 1998・1999）。

本遺跡近隣においては、内容・正確が明らかとなった遺跡数は少ないが、半径3～4kmと範囲を広げると過去に調査が行われた縄文時代・平安時代の遺跡が所在している。縄文時代では前期から後期の遺跡が、平安時代では十和田a並びに白頭山火山灰の降下年代と前後する時期の集落跡が多く確認されている。

平野部の遺跡

本遺跡周辺に所在する平野部の遺跡では、沢田遺跡、佃遺跡、小柳遺跡、露草遺跡が確認されている。佃遺跡が縄文時代前期と登録されているほかは、いずれも平安時代として登録されている遺跡である。遺跡の周辺は宅地化が著しく、過去発掘調査が実施された遺跡としては沢田遺跡・露草遺跡がある。

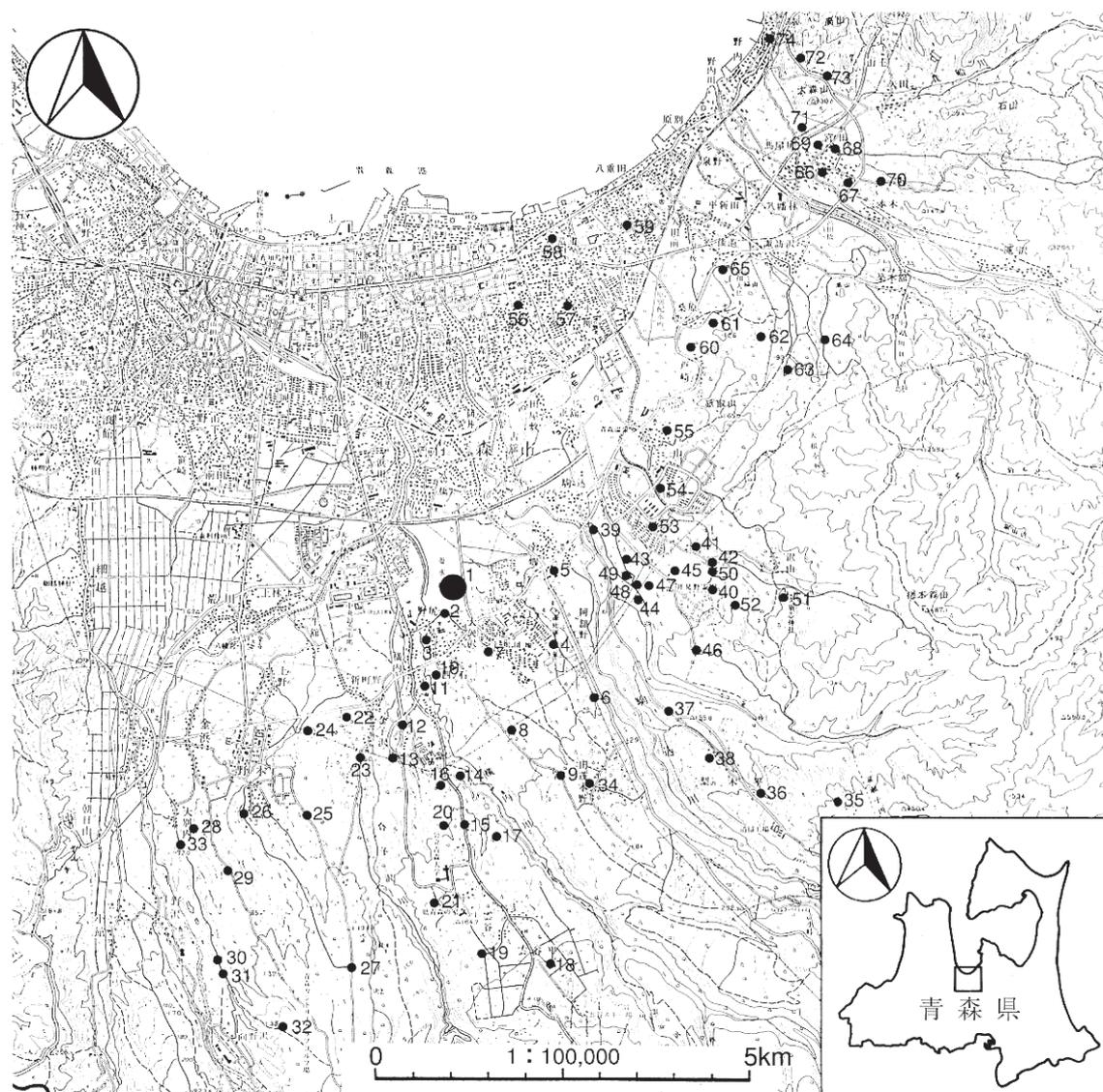
沢田遺跡はかつて沢田A遺跡と沢田B遺跡とされていたが、現在は沢田遺跡として登録されている。沢田遺跡は、昭和46年に当時沢田A遺跡として登録されていた箇所が発掘調査が行われ、竪穴式住居跡1軒を検出している。この竪穴式住居跡から土師器を主体とした遺物が出土し、カマドの袖中より墨書土器や床面より擦文土器が出土し、また、製塩土器と考えられる遺物の出土もみている（桜井 1973）。

（沼宮内陽一郎）

第1表 周辺の奇跡

番号	遺 跡 名	時 代	番号	遺 跡 名	時 代
1	大矢沢野田（1）遺跡	縄文	24	新町野遺跡	縄文・平安
2	野尻野田（1）遺跡	平安	25	野木遺跡	縄文・平安
3	野尻館遺跡	中世	26	野木沢田遺跡	平安
4	阿部野遺跡	縄文・平安	27	山口遺跡	縄文（前・後）
5	阿部野（2）遺跡	平安	28	葛野（1）遺跡	縄文
6	阿部野（3）遺跡	平安	29	葛野（2）遺跡	縄文・平安
7	大矢沢里見（1）遺跡	縄文	30	山吹（1）遺跡	縄文
8	四ッ石遺跡	縄文（中・後）	31	山吹（2）遺跡	縄文
9	四ッ石（2）遺跡	縄文（中・後）	32	山吹（3）遺跡	縄文
10	四ッ石（3）遺跡	縄文	33	山吹（4）遺跡	縄文・平安
11	横内城跡	中世	34	田茂木野遺跡	縄文（晩）
12	横内（1）遺跡	縄文（前）	35	梨の木平牧場遺跡	縄文（中）
13	横内（2）遺跡	縄文	36	深沢（1）遺跡	縄文（後）
14	横内猿沢（1）遺跡	平安	37	深沢（2）遺跡	縄文（前・後）
15	桜峯（1）遺跡	縄文	38	梨の木平遺跡	縄文
16	桜峯（2）遺跡	縄文	39	駒込館遺跡	平安
17	鏡山遺跡	縄文	40	月見野霊園遺跡	平安
18	雲谷山吹（1）遺跡	縄文	41	月見野遺跡	縄文（前・後）
19	雲谷山吹（2）遺跡	縄文	42	月見野（2）遺跡	不明
20	雲谷山吹（3）遺跡	縄文	43	月見野（3）遺跡	縄文・平安
21	雲谷山崎（1）遺跡	縄文・平安	44	月見野（4）遺跡	縄文（後）
22	合子沢松森（1）遺跡	縄文	45	月見野（5）遺跡	縄文
23	合子沢松森（2）遺跡	平安	46	月見野（6）遺跡	縄文（晩）

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
47	玉清水(1)遺跡	縄文(晩)	61	桑原遺跡	縄文
48	玉清水(2)遺跡	不明	62	稲山遺跡	縄文(前・後)
49	玉清水(3)遺跡	縄文(前)	63	牛蒡畑遺跡	縄・弥・平
50	沢山(1)遺跡	縄文(晩)	64	諏訪沢山辺(1)遺跡	縄文
51	沢山(2)遺跡	縄文・平安	65	後菟遺跡	縄文・平安
52	沢山(3)遺跡	平安	66	玉水遺跡	縄文(前)・平
53	蛭沢遺跡	縄・弥・平	67	玉水(2)遺跡	平安
54	赤坂遺跡	平安	68	王水(3)遺跡	縄文・平安
55	戸山遺跡	縄文(前・中)	69	玉水(4)遺跡	縄文(前・中)
56	佃遺跡	縄文(前)	70	山下遺跡	平安
57	小柳遺跡	平安	71	小金沢遺跡	縄文(後)
58	沢田遺跡	平安	72	鈴森(1)遺跡	縄文(後)
59	露草遺跡	平安	73	鈴森(2)遺跡	縄文・近世
60	戸崎館遺跡	中世	74	野内遺跡	縄文(晩)



第3図 周辺の遺跡

第3節 遺跡付近の地形・地質

青森県総合学校教育センター指導主事 工藤 一 彌

青森市は地形的・地質的にみて、北部の平野部、南部の八甲田山系、東部の奥羽山脈の延長部の三つに大別される。水系図から平野部は合流した数本の河川だけが北流し、南部は八甲田火山群を中心とする放射状の水系と、平野に向かって平坦面を北～北東に流れる平行河川、東部は折紙山・堀子岳・楢木森山などを中心とする放射状の水系が読み取れる。

青森平野は新生代第四紀（約170万年前～現在）に形成され、東西約10km、南北約5kmのほぼ直角三角形をしている。北は陸奥湾に面し、南は八甲田火山群につらなる火山性の台地、東は東岳を中心とした古い地層の分布する比較的急峻な山地、西は標高50～150mの比較的緩傾斜の開析が進んだ丘陵に囲まれている。火山性の台地は北～北西に流れる入内川、荒川、合子沢川、横内川、駒込川などの河川によって細分される。本遺跡はこの内、南部の火山性台地と青森平野との境界部付近に立地する。

平野部は標高15m以下の平坦地からなり、西の高田付近に荒川の扇状地、東の矢田前付近に野内川の扇状地があり、標高2～10mは各河川の三角州性の低地、標高2m以下の海岸低地は海岸線に平行な砂州とその間の湿地からなっている。それぞれの境界は市街地化や耕地整理によって不鮮明になっている。平野部と西部の丘陵地との境界には「入内断層」と呼ばれる南北方向の大きな断層が存在している。この断層は第四紀洪積世初頭（約170万年前）から活動を始め、断層の東側が最大で800m以上も北に落ち込み、南方の八甲田火山群などの後背地から運ばれた大量の砕屑物により非常に厚い地層が堆積し、青森平野が形成されていった。

南～南東側の火山性台地は、八甲田カルデラ（現在の田代平）から噴出した八甲田火砕流堆積物、いわゆる「田代平溶結凝灰岩」で構成されており、八甲田火山群から北方に続いており標高は40～500mである。八甲田牧場（標高500m）、雲谷平（200m）、梨の木平（200m）、青森ゴルフ場（150m）、月見野霊園（100m）など緩傾斜の平坦面が広く残っており、傾斜は荒川右岸の青森ゴルフ場付近で約2.5度、雲谷付近で約3度、四ツ石付近で約2.2度、田茂木野付近で約2.7度、梨の木付近で約3.5度、平均で約3度である。この平坦面上に小牧野・新町野・野木・田茂木野・蛍沢・月見野など多数の遺跡が分布している。台地を構成する溶結凝灰岩は侵食に弱いため、入内川、荒川、合子沢川、横内川、駒込川など、いずれの河川の谷壁も25～40度と他の開析谷に比べて著しく急傾斜となっている。

東部の山地は地質構造上、東北地方の脊梁山脈である奥羽山脈の延長部にあたり、新生代新第三紀（約2500万年前～約170万年前）の火山岩、堆積岩などで構成されており、流水の浸食作用により起伏の大きい地形となっている。

西部の丘陵地は開析がすすみ、稜線の標高は50～150mで緩やかに北に傾斜している。砂・砂質シルト層からなる洪積世の岡町層を基盤に砂・砂礫や八甲田火砕流堆積物などが重なり、最上位に火山灰層が堆積している。丘陵地と平野の境界部に朝日山・細越・栄山などの遺跡が分布している。

本地域の地層は大部分が新生代（約6500万年前～現在）の地層で構成されており、先第三系（約6500万年以前の地層）は東部の東岳付近と夏泊半島の東岸に部分的に分布している。東岳付近のものは石灰岩、粘板岩、チャートなどの堆積岩と花崗岩からなり時代未詳である。夏泊半島のものは石灰岩、チャ

ートからなり、石灰岩から発見されたコノドントという化石によって中生代三畳紀～ジュラ紀であることが知られている。

新生代新第三紀の地層は下位から金ヶ沢層・四ツ沢層・和田川層の順に重なっている。金ヶ沢層は主に、変朽安山岩（風化・変質した安山岩）、凝灰岩、凝灰角礫岩などからなり、全体的に変質が激しく暗緑色～紫色をしている。これらの岩石は新第三紀の海底火山活動によるものであり、野内川上流一帯に分布している。四ツ沢層は金ヶ沢層分布域の周辺や駒込川・荒川の谷底に分布する。安山岩、玄武岩、泥岩、凝灰岩からなる。凝灰岩はグリーンタフと呼ばれ緑色を呈し、流紋岩質～安山岩質である。和田川層は泥岩、凝灰岩からなり、凝灰岩は野内川下流に分布し淡緑色～淡黄色で、凝灰角礫岩や細粒凝灰岩が多い。

新生代第四紀（約170万年前～現在）の地層は岡町層と十和田・八甲田火山噴出物に分けられる。岡町層は青森市西部の岡町、新城付近に分布し、砂岩、礫岩、シルト岩などからなり、西部の丘陵地の基盤を構成している。十和田・八甲田火山噴出物は八甲田火山溶岩、八甲田火砕流堆積物、降下火山灰等からなり、溶岩は主に両輝石安山岩～玄武岩質安山岩であり多くの種類に分類されている。

八甲田火砕流堆積物は村岡・長谷（1990）によると、大きく2つに区分され、そのうち1期のものには水底火砕流堆積物として産する場合があります、従来の鶴ヶ坂層がこれに相当するという。2期のものは従来の田代平溶結凝灰岩に相当し、陸上火砕流堆積物が主体である。村岡・長谷（1990）はK-Ar法により八甲田第1期火砕流堆積物を約65万年前、八甲田第2期火砕流堆積物を約40万年前の活動としている。八甲田火砕流堆積物は「入内断層」によってできた低地を埋め、緩やかな勾配で北西側に傾斜し、横内～駒込付近から平野に没し、平野部の試錐データによると断層の東側で1000m、市の中心部では500m、市東部の矢田前付近では300mの深さまで達している。田代平付近には植物化石を多産する砂岩、凝灰岩、泥岩の薄互層からなる湖水堆積物があり、これを田代平湖成層といい、火砕流噴出によって生じたカルデラ湖に堆積したものと考えられている。

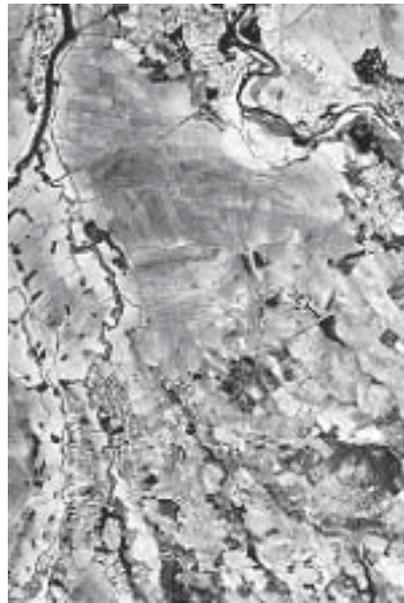
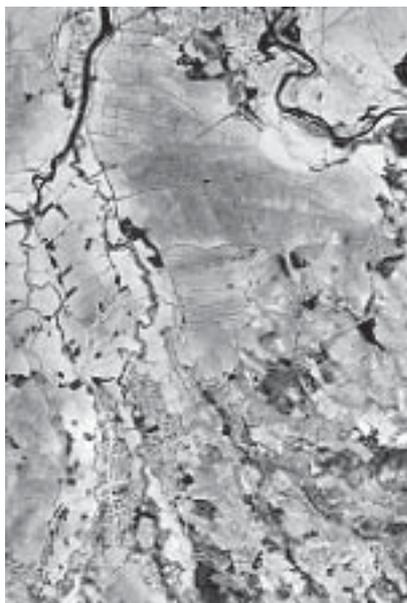
本地域の火山灰層は沢田（1976）により3層に区分され、下位から三内火山灰・大谷火山灰・月見野火山灰と呼ばれている。下位の三内火山灰は中部と最下部に浮石帯をもつ赤褐色粘土質降下火山灰で、中位の大谷火山灰は赤褐色粘土質降下火山灰と茶褐色浮石質降下火山灰よりなり、分布範囲は狭い。上位の月見野火山灰は最も広範囲に分布しており、黄褐色浮石質火山灰からなり、浮石流～火山灰流の部分も多い。

遺跡の基盤の地層は八甲田第2期火砕流堆積物であり、横内川遊水地の工事によって確認されている。遺跡の地質は、南部の火山性台地部分、北部の平野部、中央部の境界部分とで異なっている。南部の火山性台地部分では、標高20m以上で上位から黒色土・黄褐色火山灰・赤褐色火山灰の順に堆積している。中央部の境界部分では上位から黒色土・火砕流堆積物・風化帯・八甲田第2期火砕流堆積物の順に重なっている。北部の平野部では上位から黒色土（腐植土）・火砕流堆積物の順に堆積している。最上位の黒色土中には部分的に、白頭山苦小牧火山灰が含まれており、下位の広範囲に分布する黄褐色火山灰層は月見野火山灰と考えられる。月見野火山灰の下位には大谷火山灰と考えられる赤褐色の粘土質火山灰が分布している。基盤の八甲田第2期火砕流堆積物は、塊状無層理で灰色を特徴とし、赤紫色を帯びる所も多く、径が1mm前後の石英や斜長石を多量に含み、軽石や本質レンズは比較的少ないため、風化面では石英などの鉱物粒の多いことが特徴である。八甲田火砕流堆積物の層厚は50～100mに見積もられており、荒川や駒込川の中流部の河岸で観察できる。下位の第三系は荒川や駒込川の中・上流部の谷底

で見られるため、比較的浅いところにあるものと推定される。青森平野周辺では野内川上流一帯、駒込川中流、雲谷峠付近、荒川中・上流には新第三紀中新世中期の地層が分布するので、本遺跡の第四系の下位にも同様の地層が分布しているものと推定できる。

引用・参考文献

沢田庄一郎	1976	近野遺跡発掘調査報告書(Ⅲ)	(青森県教育委員会)
沢田庄一郎	1976	三内丸山(Ⅱ)遺跡発掘調査報告書	(青森県教育委員会)
沢田庄一郎	1978	近野遺跡発掘調査報告書(Ⅳ)	(青森県教育委員会)
岩井武彦他	1983	土地分類基本調査「青森東部」表層地質	(青森県)
村岡洋文・高倉伸一	1988	10万分の1八甲田地熱地域地質図・説明書	(地質調査所)
村岡洋文・長谷紘和	1990	5万分の1地質図幅 黒石地域の地質	(地質調査所)
山口 義伸	1998	大矢沢野田(1)遺跡発掘調査報告書	(青森県教育委員会)



昭和23年撮影空中写真

第4節 基本層序

今年度の試掘調査と発掘調査をあわせた調査対象範囲においては、グリッドライン95以北の標高9～10mにかけての低地では泥炭層が厚く堆積している状況が確認でき、グリッドライン95以南の標高10～26mの丘陵部では泥炭層の堆積は確認できなかった。また、発掘調査区域におけるグリッドライン95～125において、最大5m以上の砂利・廃材などが盛土されており、本遺跡における層位の水平的な連続が明確でないことから、本項では、グリッドライン95以北の層序とグリッドライン95以南の層序をわけて記述する。

グリッドライン95以北の層序

この地区では、泥炭層が主体をしめ、砂が基盤層をなしている。とくにグリッドライン15以北、グリッドライン50～55においては、泥炭層が6m以上堆積していると思われ、基盤層を確認することができなかった。それ以外の部分では、約2～3mの泥炭層の堆積がみられた。第I層～第XI層までは泥炭質であり、土色にほとんど差がみられず、主として草質と木質のような混入物の相違によって分層したため、土色は記載していない。

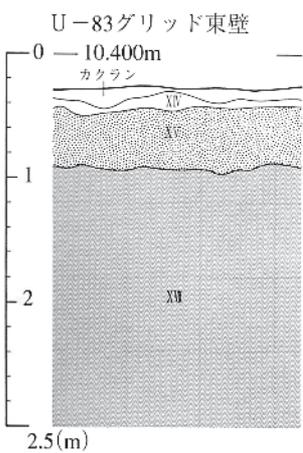
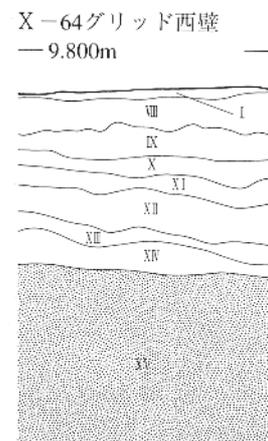
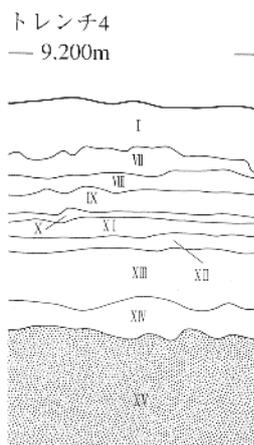
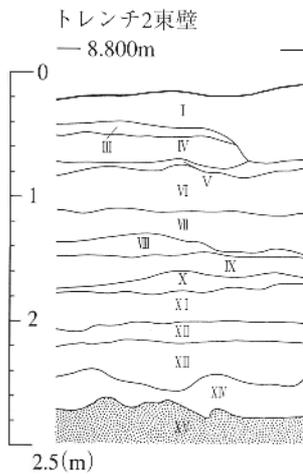
- 第I層 暗褐色を呈する。表土。
- 第II層 黒褐色を呈する。泥炭層（木本泥炭）。
- 第III層 黒色を呈する。泥炭層（草本泥炭）。
- 第IV層 黒褐色を呈する。泥炭層（木本泥炭）。
- 第V層 黒色を呈する。泥炭層（草本泥炭）。
- 第VI層 黒褐色を呈する。泥炭層（木本泥炭）。
- 第VII層 黒色を呈する。泥炭層（草本泥炭）。
- 第VIII層 黒褐色を呈する。泥炭層（木本泥炭）。
- 第IX層 黒色を呈する。泥炭層（草本泥炭）。
- 第X層 黒褐色を呈する。泥炭層（木本泥炭）。
- 第XI層 黒褐色を呈する。泥炭層（木本泥炭）。
- 第XII層 黒色（10YR1.7／1）を呈する。泥炭層（分解質泥炭）。上位で中礫浮石を確認できる。下位に縄文時代前期初頭の遺物を包含する。
- 第XIII層 黒色（10YR2／1）を呈する。粗砂が少量混入。1mm～1cm大の浮石粒が微量混入。上位に縄文時代前期初頭の遺物を包含する。
- 第XIV層 黒褐色（10YR3／2）を呈する。粗砂を主体とする土。
- 第XV層 明黄褐色（10YR6／6）を呈する。細砂と粗砂が混じった土。
- 第XVI層 にぶい橙色（7.5YR6／4）を呈する。八戸浮石流凝灰岩と思われる。
- 第XVII層 にぶい橙色（5YR7／4）を呈する。八甲田溶結凝灰岩の風化帯と思われる。

グリッドライン95以南の層序

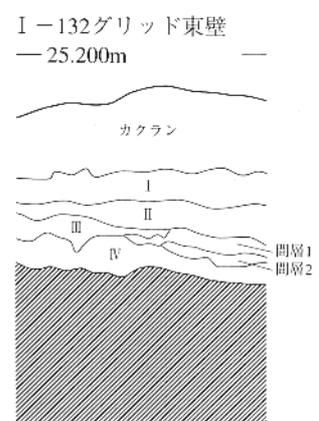
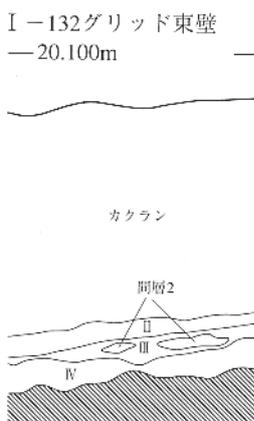
この地区は、全体的に近・現代の削平・盛土を受けており、特にグリッドライン95～125においては、5m以上の土砂が盛られていた。グリッドライン125～140では、3m～50cmの盛土がみられ、その下層において層厚0.2～1mのプライマリーな堆積を確認できた。

- 第Ⅰ層 黒褐色（10YR2／3）を呈する。炭化粒、焼土粒、ローム粒極微量。
- 第Ⅱ層 黒褐色（10YR2／2）を呈する。炭化粒、ローム粒極微量。
- 第Ⅲ層 黒褐色（10YR2／2）を呈する。ローム粒極微量。縄文時代の遺物を包含。
- 間層1 黒褐色（10YR2／3）を呈する。ローム粒極微量。
- 間層2 黒褐色（10YR2／2）を呈する。ローム粒、炭化粒微量。
- 第Ⅳ層 暗褐色（10YR3／3）を呈する。ローム粒多量。漸移層。
- 第Ⅴ層 褐色（10YR4／4）を呈する。ローム。

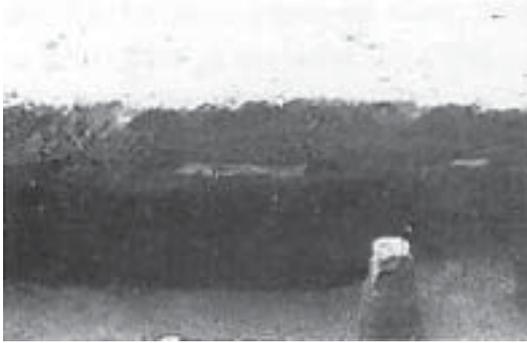
グリッドライン95以北



グリッドライン95以南



第4図 基本層序



トレンチ8西壁 (E→)



トレンチ5東壁 (W→)



墓地付近南壁 (N→)



南側調査区 (S→)

大矢沢野田（1）遺跡

試掘調査報告書

堤川広域基幹河川改修事業に先立つ試掘調査

大矢沢野田（1）遺跡試掘調査

第 I 章 調査成果

今年度の調査の結果、トレンチ 2 より縄文時代前期初頭の竪穴式住居跡 1 軒、調査区南端の法面より河川跡、トレンチ 8 より縄文時代前期初頭の土器が出土した。それ以外のトレンチからは、遺構・遺物は検出できなかった。

第 1 節 検出遺構

竪穴式住居跡（第 5 図）（註 1）

トレンチ 2 の南西側で検出した。土層観察の結果、基本層序第Ⅷ層上部から第 XV 層まで掘り込まれていた。堆積層は 3 層に分層した。全体を検出できなかったため、詳しい規模、平面形は不明であるが、東西方向を長軸、南北方向を短軸とする隅丸長方形であると思われる。壁高は、残存状態の良い西壁で約 50cm あり、やや外傾して立ち上がる。住居の付属施設としては、西壁に沿って柱穴と思われるピットを 3 基検出したが、炉は検出できなかった。覆土から、縄文時代前期初頭に帰属すると考えられる土器片が 1 点（第 5 図 1）、フレイクが 2 点出土した。第 5 図 1 は、末端にループをもつ LR 縄文が回転施文されている。内面にはミガキが施されており、焼成は良好である。

本トレンチのすぐ南側のトレンチ 8 において、同じく基本層序第Ⅷ層・Ⅷ層より縄文時代前期初頭の土器が出土しており、関連性が考えられる。

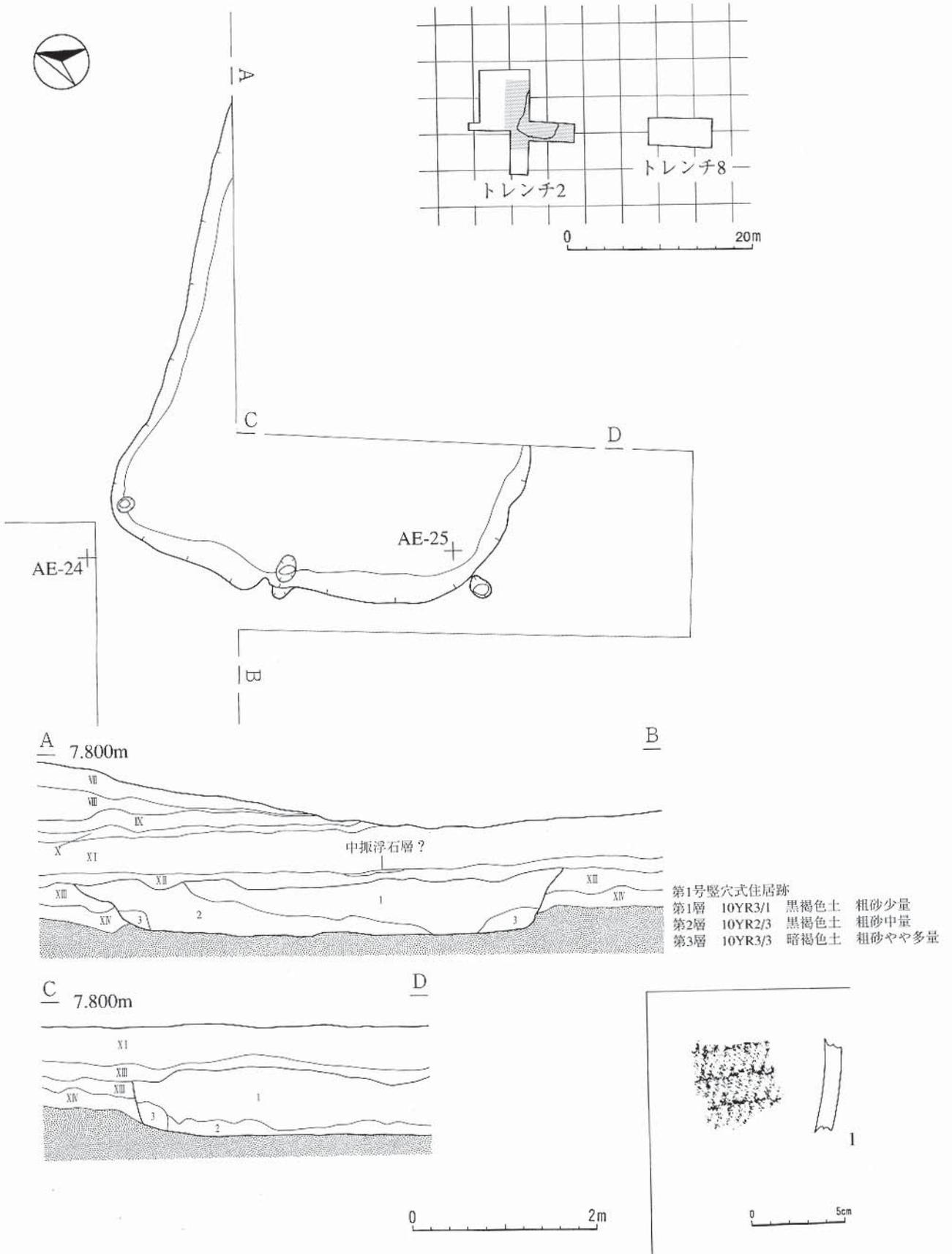
註 1 試掘調査ではあるが、来年度以降の発掘調査必要箇所を確定する重要な資料になると考えられたため、確認面にとどめず、精査を行った。

第 2 節 河川跡（第 6 図）

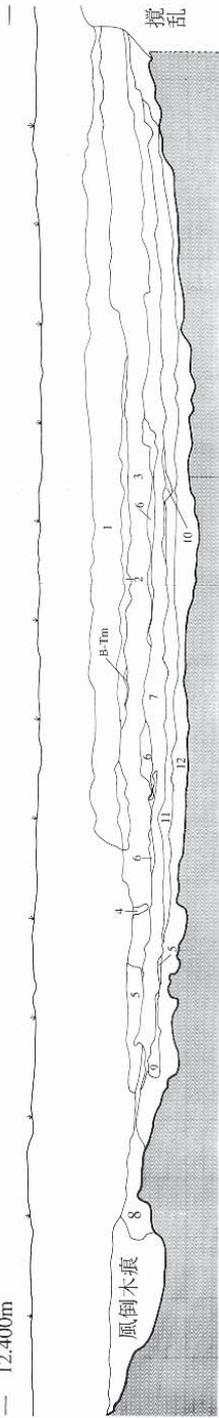
調査区南端の AF-90 グリッド付近の法面より、河川跡と考えられる断面を検出した。西側が地山まで削平されているため、明確な流路は断定できないが、平成 10 年度の青森県教育委員会による発掘調査で検出された河川跡の支流と連結する可能性が高いこと、また、その断面の形状や周辺の地形等から考えると、南東方向から北西方向へ流れていたものと推定できる。河川の幅は、約 23m と考えられる。底面は、褐灰色の粗砂と粘土が混じったような土質で、北岸、南岸ともに緩やかな立ち上がりを呈する。

堆積土は、6 層とした中位の砂層を境として、その上位に堆積する、樹木や植物遺体を多量に含んだ泥炭質の土と、下位に堆積する、軽石や風化して小塊状になった溶結凝灰岩、粗砂などを含んだ土に大きく分けることができる。3 層上位では苫小牧・白頭山火山灰と思われる火山灰が確認でき、最下層の 12 層からは円筒下層 a・b 式土器の摩耗した破片が多量に出土した。本河川跡を検出した断面の東側にあたる市道路課委託発掘調査地区において、河川の縁と考えられる部分の緩やかな傾斜を利用した土器捨て場を検出しており、円筒下層 a・b 式土器が多量に出土していることから、捨て場に廃棄された土器が河川に流れ込み、水流等の作用によって摩耗したものと考えられる。

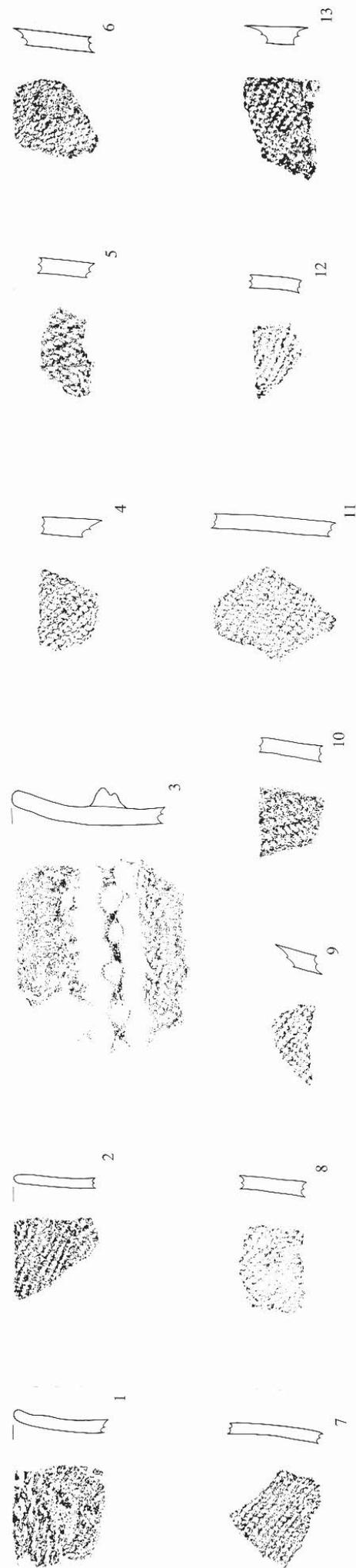
堆積状況からみて、本河川跡の時期は、縄文時代前期中葉以前より水量の豊富な河川として存在し、苫小牧・白頭山火山灰が降下する 10 世紀前葉には、それほど水量のない湿地状の谷になっていたものと考えられる。



第5図 竪穴式住居跡



河川跡
 第1層 10YR3/2 黒褐色 土 浮石 (1cm大) 少量
 第2層 2.5YR2/1 黒褐色 土 草質多量、樹皮少量
 第3層 10YR2/2 黒褐色 土 草質、木質多量
 第4層 10YR5/4 におい黄褐色 土 砂と粘土が混じった土、浮石少量
 第5層 10YR3/3 黒褐色 土 砂層、樹皮少量
 第6層 10YR1/7 黒褐色 土 樹皮少量浮石微量
 第7層 10YR3/2 黒褐色 土 浮石 (1cm~10cm大) 多量、砂とシルト混じる。
 第8層 10YR2/1 黒褐色 土 浮石微量
 第9層 10YR1/7 黒褐色 土
 第10層 10YR5/2 灰黄褐色 土 砂層、浮石 (1cm大) 少量
 第11層 10YR4/1 褐色 土 浮石 (5mm~4cm大) やや多量、砂と粘土が混じった土、前層前半の上層や多量



番号	出土地点	層位	器種	部位	器厚(cm)	外面文様	胎土	焼成	備考
1	河川跡	12層	縄文土器	口縁部	1.0	Lの結節回転文	繊維混入	良好	磨耗している
2	河川跡	12層	縄文土器	口縁部	0.6	R L R	繊維混入	良好	磨耗している
3	河川跡	12層	縄文土器	口縁部	1.0	R L R	繊維混入	良好	磨耗している
4	河川跡	12層	縄文土器	胴部	1.1	R L R	繊維混入	良好	磨耗している
5	河川跡	12層	縄文土器	胴部	0.9	R L R	繊維混入	良好	磨耗している
6	河川跡	12層	縄文土器	胴部	1.0	R L R	繊維混入	良好	磨耗している
7	河川跡	12層	縄文土器	胴部	0.7	R L R	繊維混入	良好	磨耗している
8	河川跡	12層	縄文土器	胴部	1.0	R L R	繊維混入	良好	磨耗している
9	河川跡	12層	縄文土器	胴部	1.1	R L R	繊維混入	良好	磨耗している
10	河川跡	12層	縄文土器	胴部	0.8	R L R	繊維混入	良好	磨耗している
11	河川跡	12層	縄文土器	胴部	1.1	R L R	繊維混入	良好	磨耗している
12	河川跡	12層	縄文土器	胴部	0.9	R L R	繊維混入	良好	磨耗している
13	河川跡	12層	縄文土器	胴部	1.2	R L R	繊維混入	良好	磨耗している
14	河川跡	12層	縄文土器	胴部	1.1	R L R	繊維混入	良好	磨耗している
15	河川跡	12層	縄文土器	胴部	0.7	R L	繊維混入	良好	磨耗している

第6図 河川跡セクション・河川跡出土遺物

第3節 遺構外出土遺物

今年度の調査では、遺構外よりダンボール箱換算で1箱弱程度の遺物が出土している。出土した遺物のほとんどが土器であり、これらは全てAE-28グリッド付近トレンチ8の第XII・XIII層より出土したものである(第7図)。第XII・XIII層の一括資料であり、帰属時期が縄文時代前期初頭に集約されることから、1群として捉えることとし、文様モチーフ、施文技法によって3類に分類した。

第1類土器(第8図1~4)

竹管ないしへら状工具による刺突文、コンパス文が施される土器である。

1は、平縁の深鉢形土器である。口頸部がくびれ、口縁部に向かってやや内湾気味に立ち上がる。胴部は、中半でやや膨らみ、下半に向かって窄まるような器形を呈する。口縁部文様は、ループをもつLR縄文の横位回転文が地文として施された後、口唇部から4段、口頸部のくびれに4段のへら状工具による刺突列が施され、地文が区画される。刺突は、器面に対して垂直に施されるのではなく、鋭角に施されている。口頸部の刺突列の下位には、へら状工具によるコンパス文が施される。胴部には、口縁部文様の地文と同じく、ループをもつRL縄文の横位回転文が全面に施される。焼成は良好で、胎土には繊維が含まれる。2は、一見爪形を呈する長さ0.6cm~1cm程の直線状の刺突が、平縁の口縁に対してほぼ垂直に4段施されており、口縁部に近い最上段の刺突の長さがほかの段のそれに比べて短い。器厚は、0.5~0.6cmと薄い。器内面と口唇部は、調整によって平滑化されている。器内面と口唇部は、調整によって平滑化されている。3は、Lの側面圧痕が施された後、半截した竹管状の工具により刺突が横位に施されている。4は、半截した竹管状の工具により刺突が横位に数条施されている。焼成は不良で、胎土には繊維が含まれている。

表館式(佐藤・渡辺 1961)、芦野I群(名久井 1971)に帰属する土器である。

第2類土器(第8図5~7)

竹管状の工具によって押し引き沈線文が施される土器である。

5~7は、竹管状の工具によって、直線ないし緩やかな波状を呈する数条の押し引き沈線文が横位に施されている。5は、LRの斜縄文が施された後、押し引き沈線文が施されており、底部付近の破片と考えられる。6は口縁部、7は底部付近の破片と考えられる。いずれも焼成は良好で、胎土には繊維が含まれる。

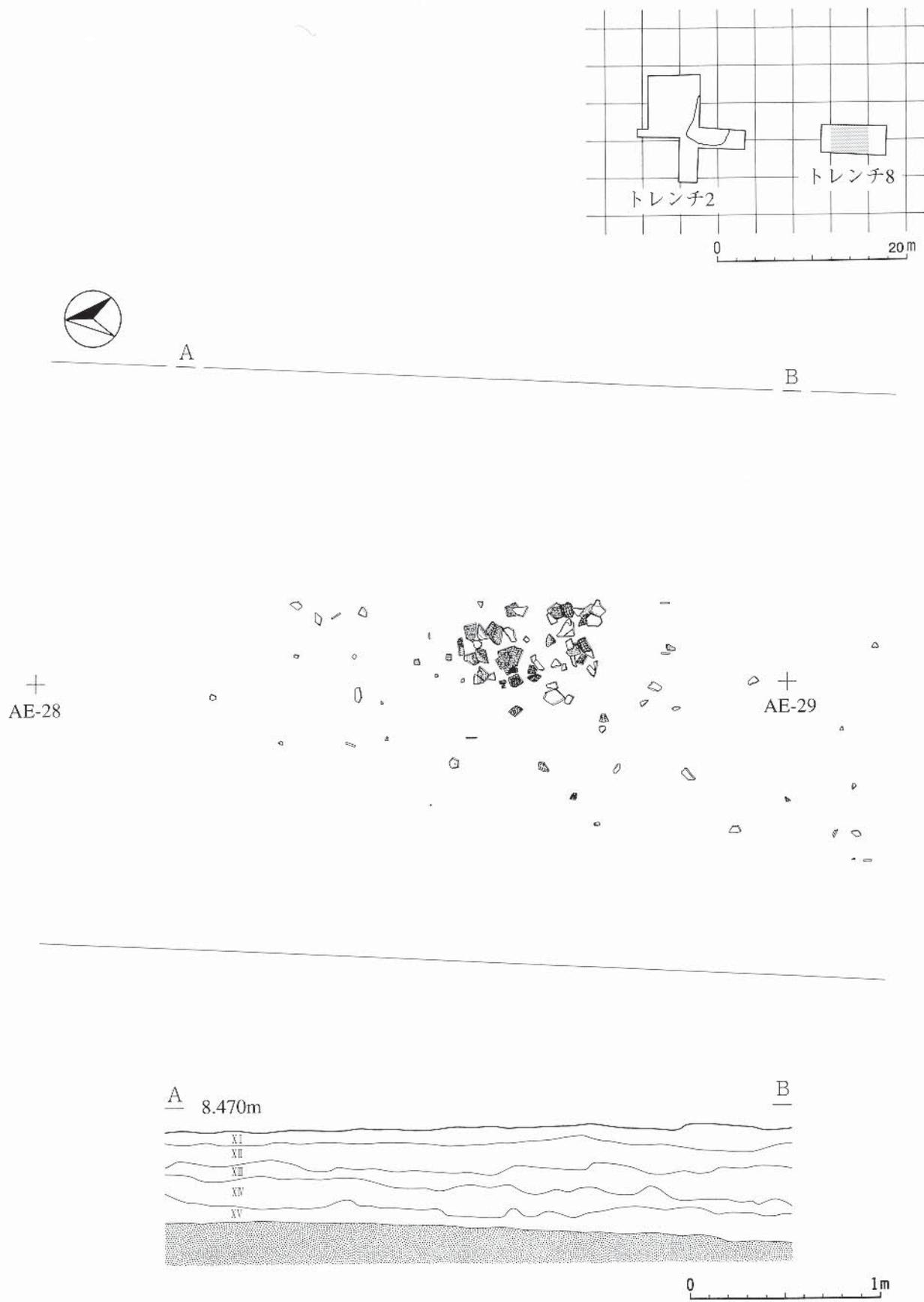
早稲田6類(佐藤他 1957)に帰属する土器である。

第3類土器(第8図8~15)

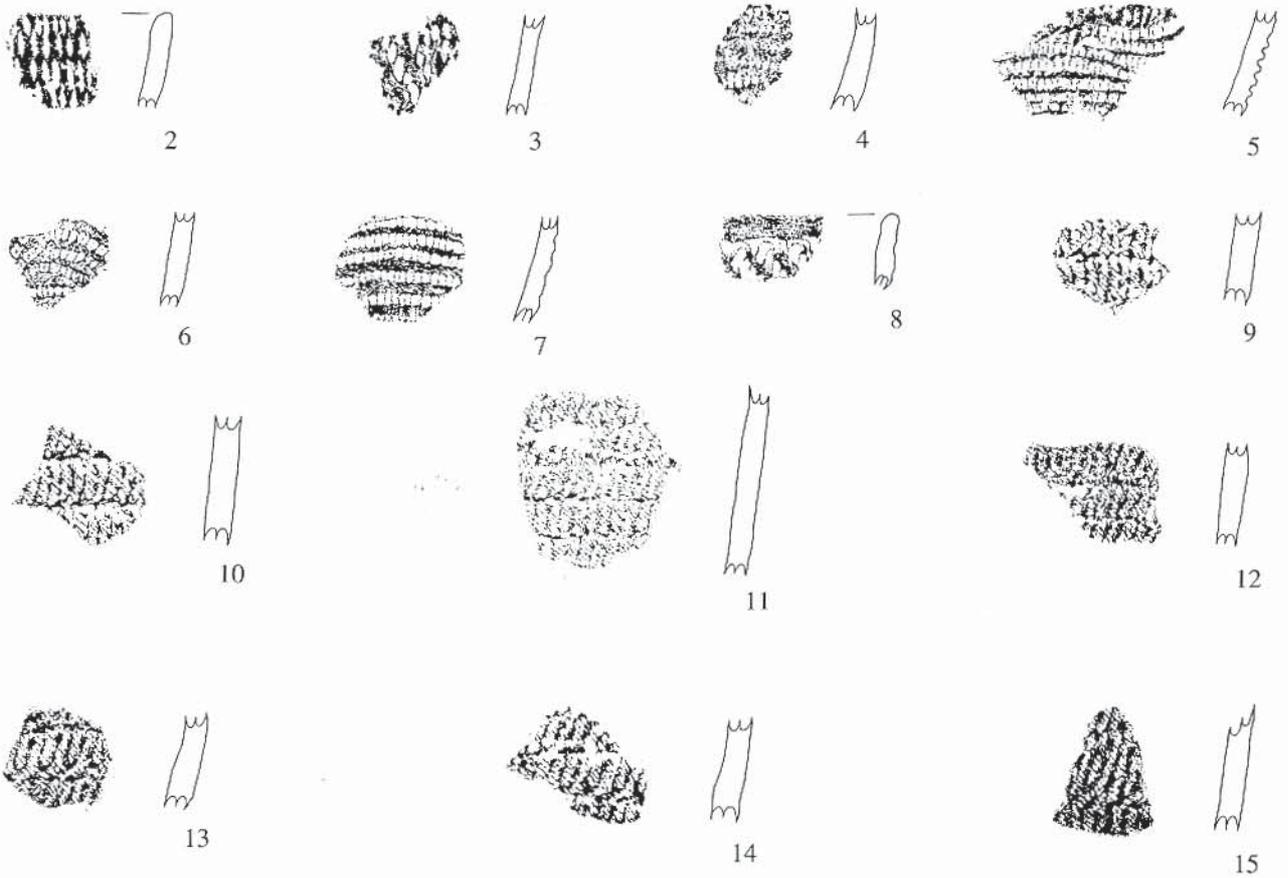
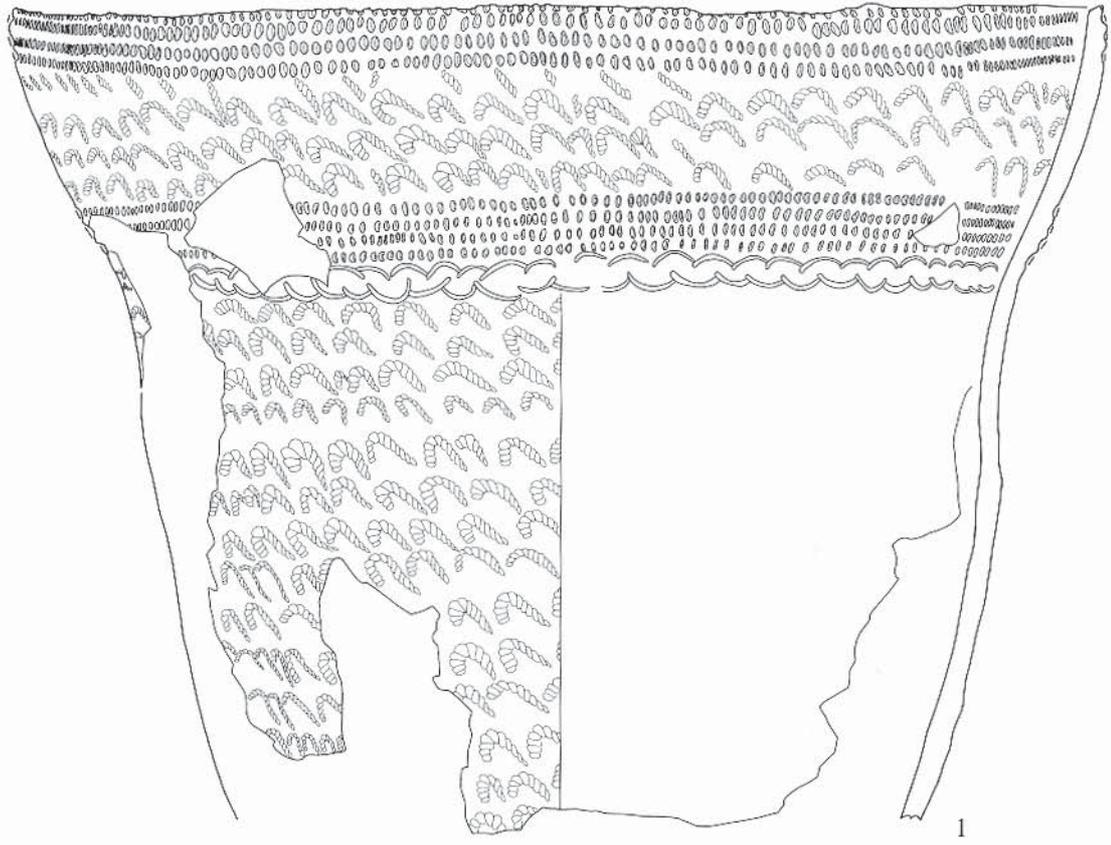
ループ文が施されている土器である。

8は口縁部、それ以外は胴部破片である。8はRL、それ以外はいずれも末端にループをもつLR縄文の回転によって重層的に文様が施されている。9、10と13、14はそれぞれ同一個体であると思われる。いずれも焼成は良好で、胎土には繊維が含まれる。

ループ文は表館式・芦野I群ないし早稲田6類のいずれの土器においても確認されている文様であるが、これらは破片資料であり、全容を窺い知れないため、いずれの型式に帰属するか明確に断定できないが、ループ文を構成する原体の長さからすると早稲田6類に帰属する可能性が高いと考えられる。



第7図 トレンチ8土器出土状況



第8圖 遺構外出土遺物

番号	出土地点	層位	器種	部位	器厚(cm)	外面文様	胎土	焼成	備考
1	トレンチ8	XⅢ	縄文土器	—	0.9	刺突文、コンパス文、ループ文	繊維混入	良好	第1類
2	トレンチ8	XⅢ	縄文土器	口縁部	0.6	刺突文、Lの側面圧痕	繊維混入	良好	第1類
3	トレンチ8	XⅢ	縄文土器	胴部	0.7	刺突文	繊維混入	良好	第1類
4	トレンチ8	XⅢ	縄文土器	胴部	0.9	L R、押し引き沈線文	繊維混入	良好	第1類
5	トレンチ8	XⅢ	縄文土器	胴部	0.8	押し引き沈線文	繊維混入	良好	第2類
6	トレンチ8	XⅢ	縄文土器	胴部	0.7	押し引き沈線文	繊維混入	良好	第2類
7	トレンチ8	XⅢ	縄文土器	胴部	0.8	押し引き沈線文	繊維混入	良好	第2類
8	トレンチ8	XⅢ	縄文土器	口縁部	0.7	ループ文 (R L)	繊維混入	良好	第3類
9	トレンチ8	XⅢ	縄文土器	胴部	0.9	ループ文 (L R)	繊維混入	良好	第3類・10と同一個体
10	トレンチ8	XⅢ	縄文土器	胴部	1.0	ループ文 (L R)	繊維混入	良好	第3類・9と同一個体
11	トレンチ8	XⅢ	縄文土器	胴部	0.8	ループ文 (L R)	繊維混入	良好	第3類
12	トレンチ8	XⅢ	縄文土器	胴部	0.8	ループ文 (L R)	繊維混入	良好	第3類
13	トレンチ8	XⅢ	縄文土器	胴部	0.9	ループ文 (L R)	繊維混入	良好	第3類・14と同一個体
14	トレンチ8	XⅢ	縄文土器	胴部	0.9	ループ文 (L R)	繊維混入	良好	第3類・13と同一個体
15	トレンチ8	XⅢ	縄文土器	胴部	0.8	ループ文 (L R)	繊維混入	良好	第3類

第3表 遺構外出土遺物観察表

第Ⅱ章 小結 ～遺跡の範囲について～

今年度の調査区域は、遺跡範囲内をほぼ南北に走る工事用道路の西側に沿って隣接する遊水池築堤工事予定地にあたり、試掘調査区域の東側に、工事用道路を挟んで青森市建設部道路課による市道筒井幸畑団地線特殊改良事業の工事予定地が隣接する。試掘調査区域は、八甲田火山性台地の裾野に広がる平野部にあたり、調査区北端から南端まで標高差はほとんどみられない。

今年度の試掘調査では、13のトレンチにより、対象面積2000㎡のうち、総面積延約250㎡について、遺構・遺物等の確認を行った。

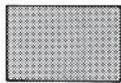
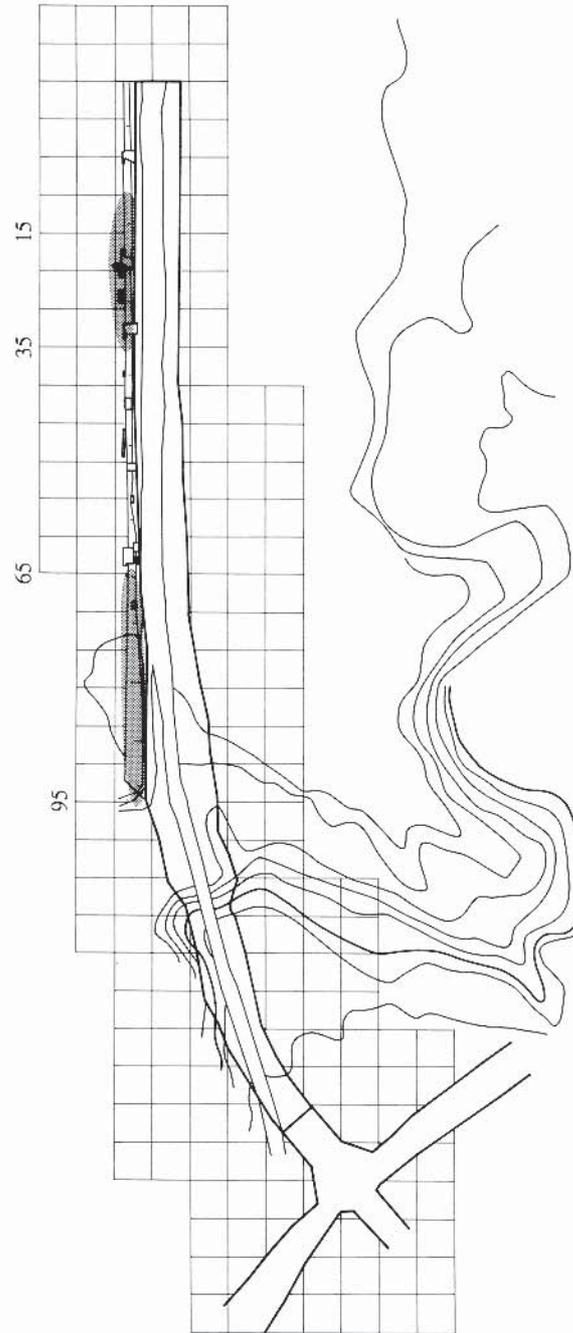
試掘調査の結果、AE-23グリッド付近のトレンチ2基本層序第Ⅲ層より縄文時代前期初頭の竪穴式住居跡1軒、AD-28グリッド付近のトレンチ8基本層序第Ⅱ・Ⅲ層より、縄文時代前期初頭の土器、AA-86～93付近の法面より円筒下層a・b式土器の破片を多量に包含する河川跡の断面を検出し、それ以外のトレンチからは、遺構・遺物を確認できなかった。

また、工事用道路を挟んで隣接する市建設部道路課委託発掘調査区域では、X-65付近より溝状遺構、87～92ラインにかけて円筒下層a・b式土器の捨て場（遺物集中ブロック）を検出している。

調査区域においては、泥炭層が厚く堆積しており、各トレンチで確認した泥炭層の層厚は、トレンチ1で約5m以上、トレンチ2・3で約2m、トレンチ4で約1.5m、トレンチ5で約5m以上、トレンチ6で約1m、トレンチ7で約0.6mである。泥炭層には、遺物は全く混入していないが、泥炭層の下層に前期初頭の遺構・遺物を検出した第Ⅱ・Ⅲ層が存在する。調査区域内の法面より土層を観察すると、泥炭層と第Ⅱ・Ⅲ層は南側の丘陵部に向かうに連れて薄くなっていき、グリッドライン75付近で途切れ、地山のみとなる。現在の地形をみると、調査区北端から南端まで標高差はほとんどなく、ほぼ水平な状況を呈し、調査区南端のグリッドライン95付近が平野部と丘陵の境界になっているように見て取れるが、グリッドライン75以南について、その法面を観察すると、河川跡の断面において泥炭質の堆積土が確認できるAA-86～93周辺以外は表土直下が田代平溶結凝灰岩となっており、原地形はグリッドライン75付近まで、舌状丘陵の先端部が張り出していたと推定することができる。したがって、75グリッドライン以北については縄文時代前期初頭を主体とし、75グリッドライン以南は縄文時代前期中葉を主体としていると考えられる。

以上のことから、来年度以降、発掘調査が必要な範囲は、縄文時代前期初頭の竪穴式住居跡が検出されたトレンチ2と縄文時代前期初頭の土器が出土したサブトレンチ3を中心としたグリッドライン15～35の範囲、市建設部道路課委託発掘調査地区で溝状遺構・土器捨て場を検出した箇所と河川跡を検出した箇所を中心としたグリッドライン65～95の範囲であると考えられる（第9図）。

（設楽 政健）



調査必要範囲



第9図 調査必要範囲



調査風景 (N→)



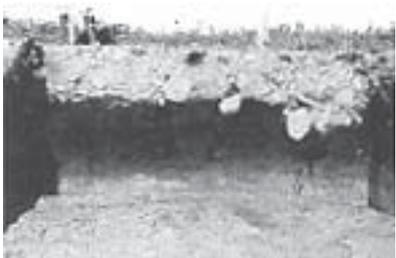
トレンチ1 (E→)



トレンチ2 東壁 (W→)



トレンチ4 東壁 (W→)



トレンチ7 東壁 (W→)



竪穴式住居跡セクション (N→)



竪穴式住居跡確認状況 (S→)



竪穴式住居跡完掘状況 (N→)



トレンチ8 土器出土状況 (E→)



河川跡 (S→)

写真3



写真图版 2

大矢沢野田（1）遺跡

発掘調査概要報告

市道筒井幸畑団地線特殊改良事業に先立つ
発掘調査

大矢沢野田(1)遺跡発掘調査概要

第 I 章 調査成果の概要

青森市建設部道路課委託の発掘調査区域は、地形的には平野部と丘陵地、地質的には、田代平溶結凝灰岩を基盤とする八甲田火山性台地丘陵上の標高20m前後に位置する区域、田代平溶結凝灰岩を基盤とする丘陵地と平野部の境界、もう一つは青森平野に相当する標高10m程の平坦な区域の三つの地形に区分される。

遺跡の環境

丘陵地に位置する南側の調査区域は、比高差がほとんどない平坦な地形であり、110ライン付近で北傾する急斜面となるまで南側からの緩斜面が続いていた。

調査区域内には碎石が一面に敷かれていたため、粗掘りを開始する前に重機を用いて碎石の撤去を行ったところ、碎石の下部には暗褐色を主体とする土層が堆積しており、緩やかに北西に向かい傾斜する地形であった。碎石の下部は暗褐色土の堆積であることから、過去に何らかの削平が行われた可能性がある。

遺跡内の層序

平野部分に位置する区域では、西側に隣接する試掘調査部分同様に泥炭層が2m程度の厚さで堆積する所がほとんどであったが、70～85ライン付近では表土から基盤の基本層序第XV層までの厚さが数十cmと、薄い堆積であった。平野部分の調査可能な範囲は、概して東西方向の幅が2m程度と極端に狭いため、原地形が東側に向かいどのように変化するのかは不明であるが、南北方向へは試掘調査部分と同様の原地形を呈する。

これら二つの区域からはフラスコ状土坑・Tピットを各1基、溝状遺構1条、遺物集中ブロック1基の検出があった。フラスコ状土坑・Tピットは調査区域南側の標高24m付近からの検出した。溝状遺構・遺物集中ブロックは、平野部分に相当する標高10m前後からの検出であった。

検出遺構

南側の調査区域から出土した遺物は少なく、縄文時代中期末から後期と思われる土器・石器や時代・時期不明の遺物が散発的に出土する状況であった。平野部分の調査区域の遺物集中ブロックから縄文時代前期の円筒下層a式・b式土器とそれに伴う石器が多量に出土した。

出土遺物

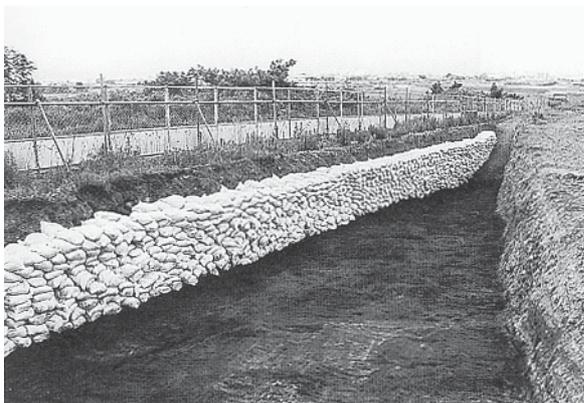


写真5 南側碎石撤去後 (W→)



写真6 作業風景 (N→)

第1節 南側地区の検出遺構と出土遺物

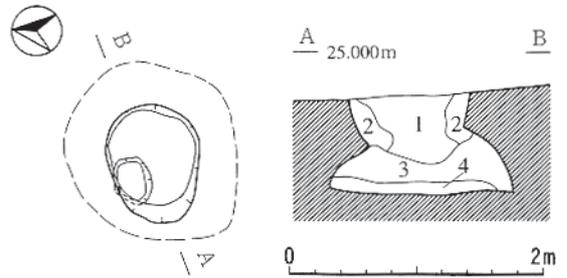
第1号土坑

検出状況 調査区南側のG-135グリッドから検出した。基本層序第IV層より掘り込まれ、4層に分層された覆土は、黒褐色土を主体として堆積する。開口部径96cm×74cm、底径156cm×140cm、確認面からの深さ78cm

出土遺物

を計る。底面から内傾し、頸部が幅広の袋状の断面形を呈する。壁面・底面とも堅緻である。底面北壁際に深さ約5cmの落ち込みを有する。

遺物は、覆土及び底面からLR単節を施した縄文時代中期末から後期と思われる土器片が出土した。



第1号土坑

第1層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒混入・炭化物粒混入
第2層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒・ロームブロック混入
第3層	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒混入・炭化物粒微量に混入
第4層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒・炭化物少量混入



第10図 第1号土坑

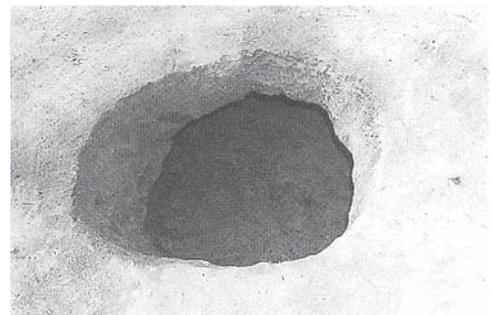
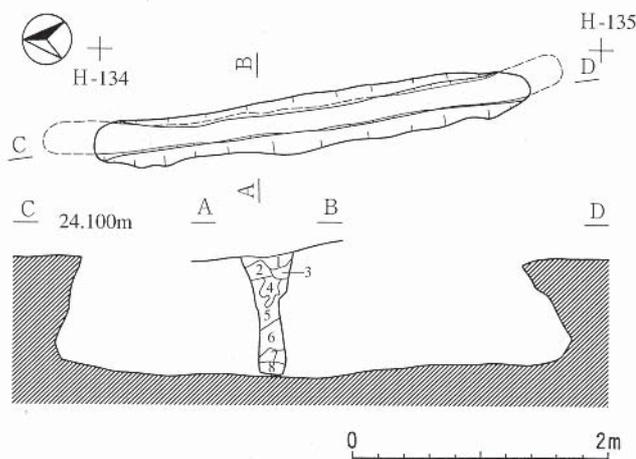


写真7 完掘 (S→)

第1号Tピット

検出状況 H・I-135グリッドから検出した。基本層序第IV層より掘り込まれ、覆土は黒褐色土・暗褐色土を主体として堆積する。規模は、開口部で348cm×48cm、底部で416cm×20cm、確認面からの深さは約100cmを計る。長軸方向の壁面が、内傾しながら立ち上がる袋状の断面形、短軸方向はやや外傾して立ち上がる。壁面は脆弱であるが、底面は比較的堅緻である。

出土遺物 遺物は出土しなかった。帰属時期は不明である。



第11図 第1号Tピット



写真8 第1号Tピット完掘 (S→)

第1層	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒少量・浮石微量混入
第2層	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒少量混入
第3層	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒少量混入
第4層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒中程度混入
第5層	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒中程度混入
第6層	10YR4/4	褐色土	ローム粒・炭化物粒少量混入
第7層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	ローム粒中程度混入
第8層	10YR3/1	黒褐色土	ローム粒中程度混入



写真9 遺物出土状況 (W→)



写真10 遺物出土状況 (W→)

遺構外出土遺物

遺構外からは、縄文時代中期末から後期初頭と思われる土器が少量出土した。散発的な出土状況であり、遺物も破片での出土がほとんどである。

遺物の帰属時期

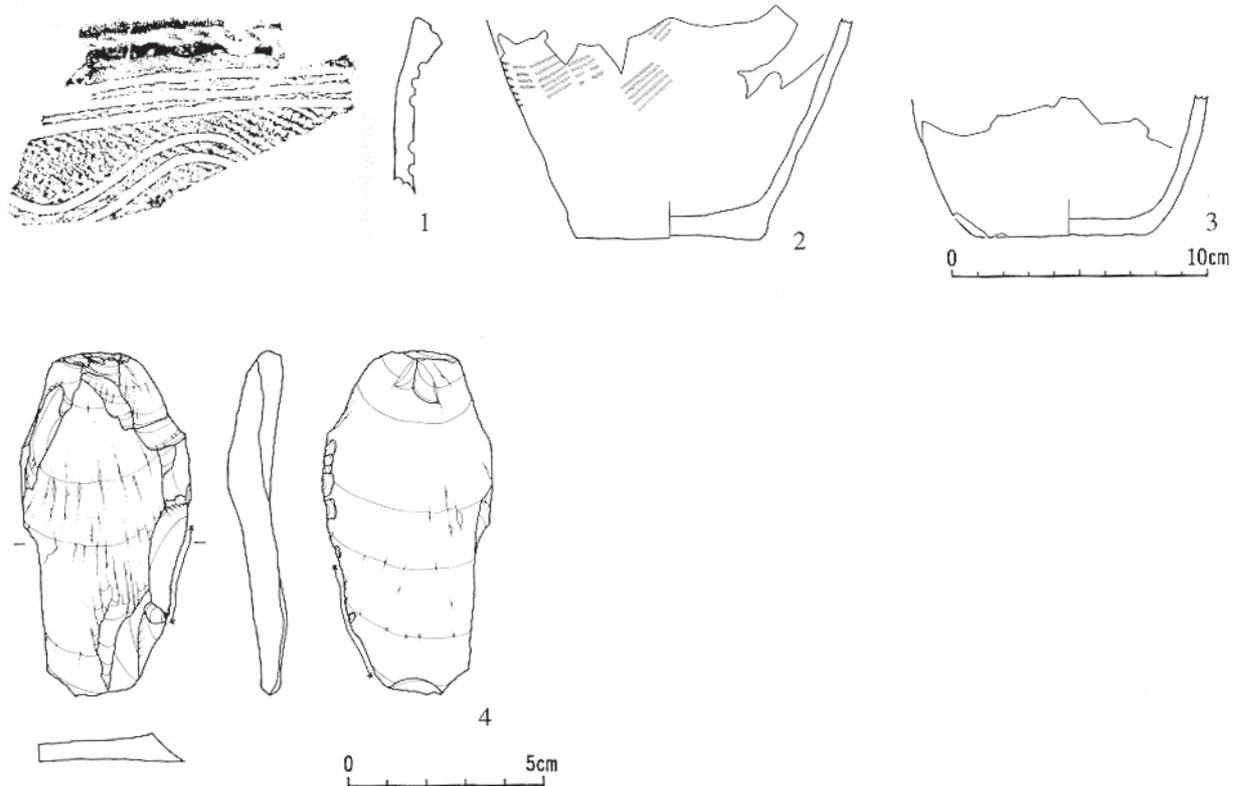
第12図1はI-134グリッドから出土した。地文にRLを施した後、沈線を施文したものであり、口唇部にはLR圧痕が施される。中期末から後期初頭と思われる。第12図2・3はH-135グリッド、基本層序第II・III層から出土した。第12図2は磨消縄文が施される。

土器

第12図4は微細な剥離を有する珪質頁岩製の剥片石器である。

石器

南側の調査区からはこの他、フレイクや自然礫が少量出土しただけである。



第12図 南側出土遺物

第2節 平野部からの検出遺構と出土遺物

第1号溝状遺構

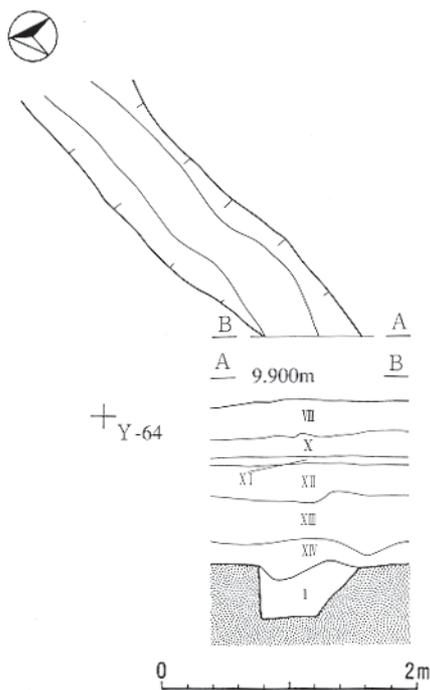
検出状況

調査区北側のX-64グリッドから検出した。基本層序第XV層において、北東から南西方向へ向かう灰褐色土の落ち込みを確認した。掘り込み面は基本層序第XIV層である。覆土は1層で、少量のローム粒・浮石粒が含まれるほかは、混入物は認められない。

トレンチ状に調査したグリッドより検出し、長軸方向が西側の工用道路及び、東側の調査区外に続いたため、遺構の全容は検出していない。規模は、開口部63cm×75cm、底部で32cm×40cm、確認面からの深さは約40cmを計る。セクション面での壁面は北側が垂直に立ち上がるが、全体に外傾しながら立ち上がる。底面は凹凸を有し、非常に湿性に富むため壁面・底面ともに脆弱である。

帰属時期

遺物は出土しなかった。明確な帰属時期は不明であるが、漸位層に相当する基本層序第XIV層より掘り込まれること、試掘調査においてサブトレンチ3の基本層序第XIII層より、表館式土器、早稲田6類土器が出土していること、及び縄文時代前期初頭に帰属すると考えられる竪穴式住居跡が、基本層序第XIII層より掘り込まれることを考慮すると、縄文時代前期初頭より古いと思われる。



第1号溝状遺構

第1層 10YR4/2 灰褐色土 ローム粒・浮石少量混入

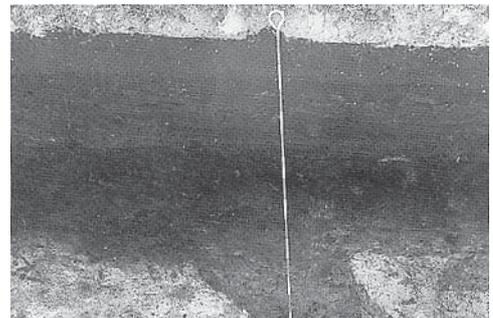


写真11 第1号溝状遺構セクション (E→)



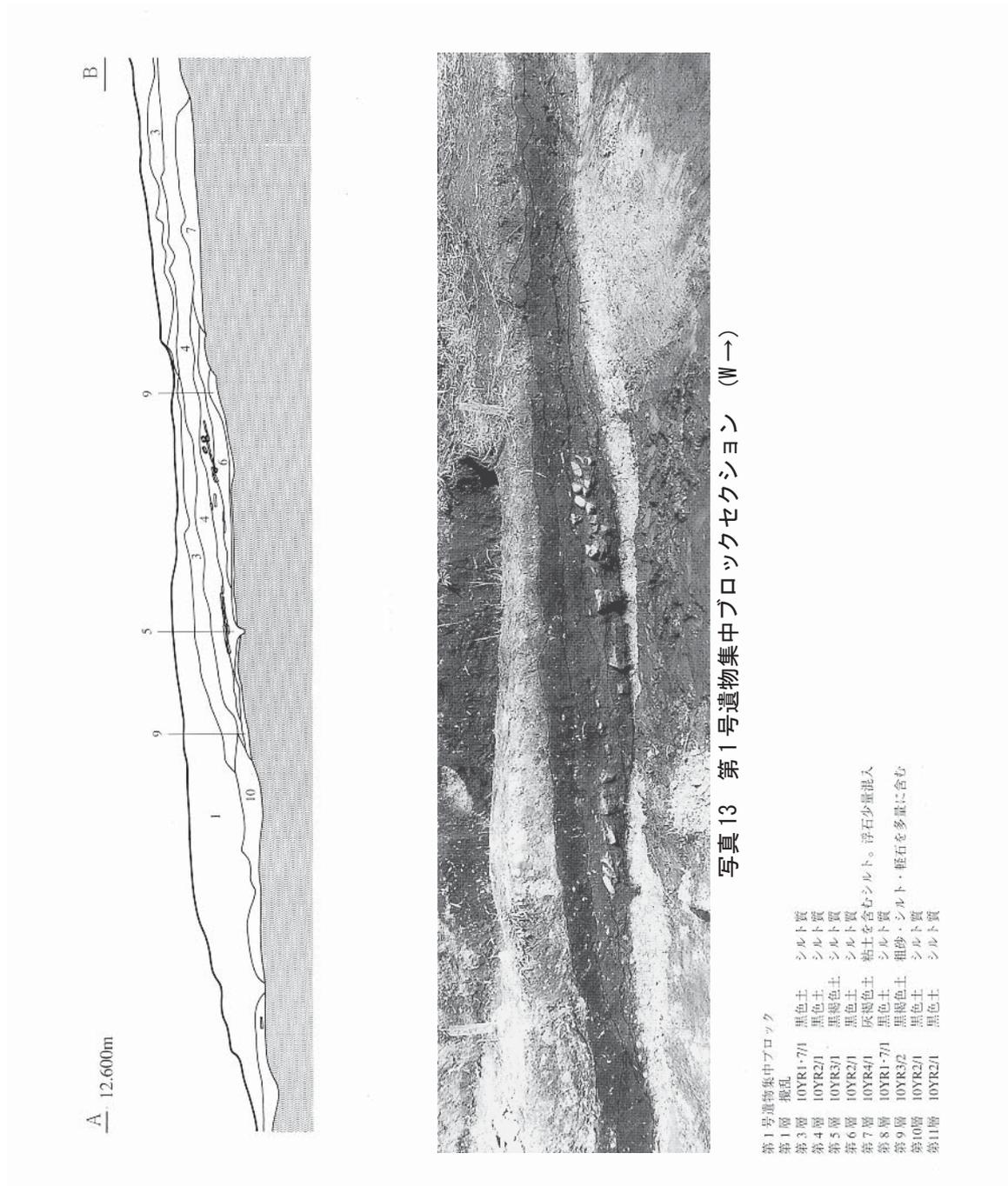
写真12 第1号溝状遺構完掘 (N→)

第13図 第1号溝状遺構

第1号遺物集中ブロック

S～U-88～91グリッドで検出した。本遺構の約30m西側には、試掘調査により確認された河川跡の断面が露出している。南側の急斜面が下りきった北傾する緩やかな斜面にあり、廃材等を多く含んだ堆積土の下層に、縄文時代前期中頃の遺物を多量に包含していた。ローム・浮石等の混入物は堆積土中に少量認められる程度であるが、本遺構周辺の遺物の出土状況と比較すると遺物の出土量及び出土状況が突出したものであり、遺物集中ブロックとして認定した。

検出状況



第14図 第1号遺物集中ブロック

遺物出土状況

土器は全体的に破片が多いが、個体が押し潰された状態で出土したものも少なからず出土している。U-85グリッド以北では遺物の出土がまったく認められないが、工事用道路西側下部及び南側の丘陵地方向、また調査区外である東側への範囲の広がりが見込まれる。

遺物廃棄以前

覆土第3層から第11層まで平均して多量の遺物が出土している。第11層以下は地山である基本層序第XV層となり漸位層が存在しないことから廃絶された住居への遺物の廃棄の可能性も想定されたが、遺物取り上げ後の精査で柱穴や炉跡等は認められなかった。

田代平溶結凝灰岩

遺物包含層の下層は、緩やかに北傾する田代平溶結凝灰岩層であり、遺物の中にはこの田代平溶結凝灰岩層に接する様に廃棄されていたものも出土している。

円筒下層 a・b式土器

遺物は、円筒下層 a・b式土器を主体として少量の石器が出土している。破片での出土が多いが、復元され個体となるものの点数は比較的多くなると思われる。

石器

石器は特に石匙の出土が多く、その他石鏃・石錐・敲磨器類等が、ほかには石製品が1点出土している。

石匙は、縦型のものが多く出土しており、主要剥離面に光沢が認められるものが多い。

河川跡

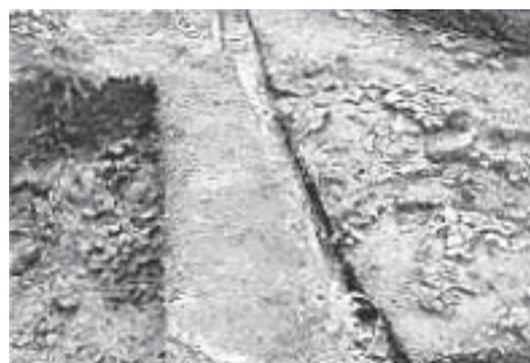
本遺構以北のU-85グリッド周辺においては、試掘調査において確認した河川跡と同様の堆積土である第12層及び、基本層序第XV層に相当する田代平溶結凝灰岩層が確認されている。

過去に、U-85グリッド以北において河川等何らかの水利の影響が考えられるが、このことについては、まとめの項において若干記述する。

写真 13～16 遺物出土状況



(S→)



(N→)



(N→)



田代平溶結凝灰岩層直上より出土した円筒下層 b 式土器 (N→)

第1号遺物集中ブロック出土遺物

1. 土器 土器はダンボール換算で44箱出土した。

本遺構の遺物包含層が約30～50cmであり、遺構精査中は湧水が激しく、包含層毎の遺物の取り上げが困難であったため、土色の差異が明瞭な覆土第3層より上層と第4層より下層と分層し、遺物の取り上げを試みたが、遺構の縁辺部に相当すると考えられることもあり、出土した土器には層位別の明確な差異は認め難かった。

混在する
出土状況

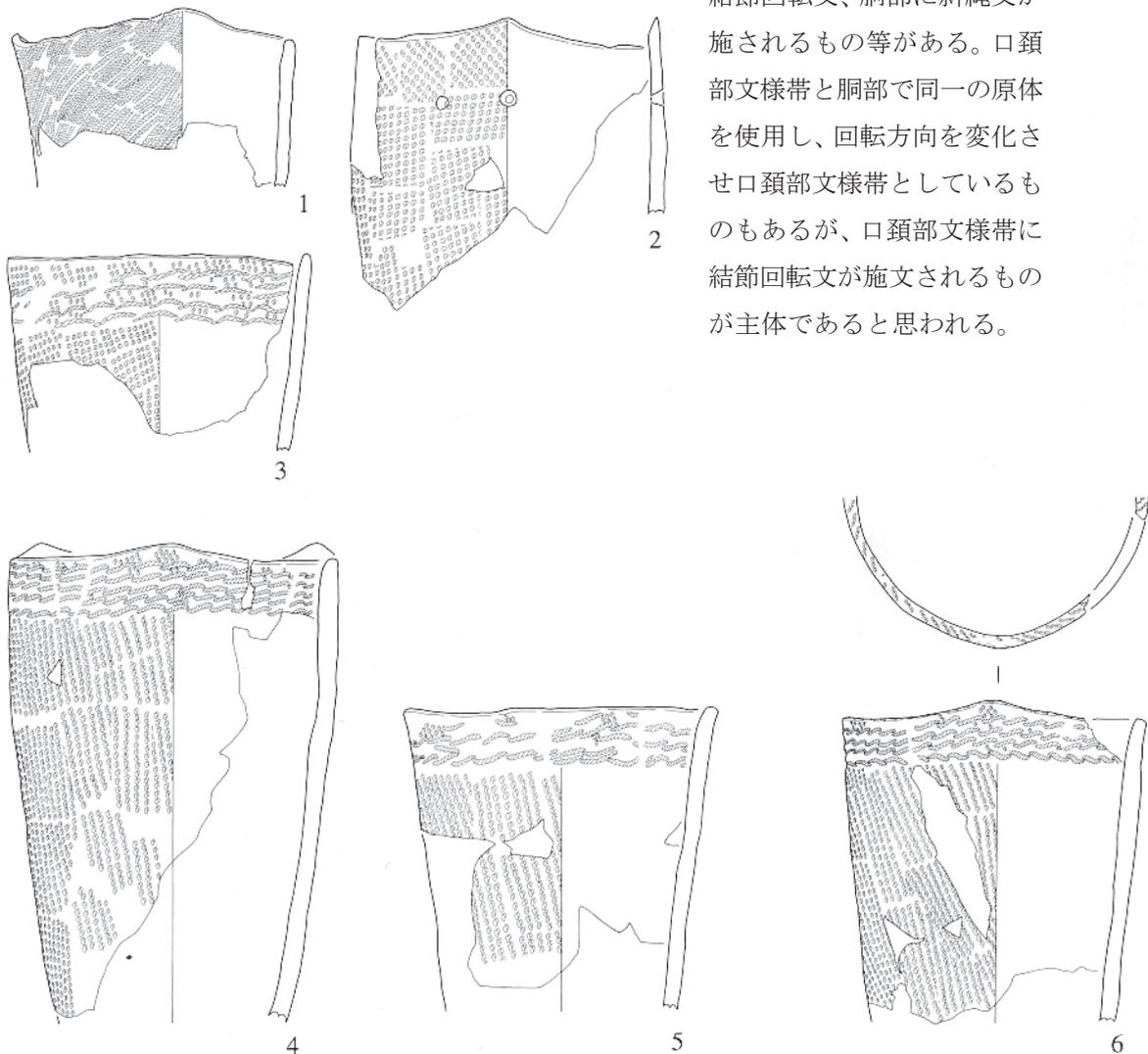
今回の報告は概要報告のため、土器の復元については、本遺構のほぼ中心部にあたるT-89グリッドから出土した遺物に主眼を置いて復元作業を行った。本遺構総出土土器量に対する割合は約3分の1である。このため、実測可能となるまで復元された個体数が少ない。

今後の整理の進捗に伴い、本遺構出土土器の傾向が明らかになるものと思われるが、実測可能となった個体のうち文様構成について判断し得るものについて概略を記述する。

円筒下層a式土器
結節回転文

円筒下層a式土器は、口頸部様帯がなく斜縄文が施文されるもの及び、口頸部文様帯に

結節回転文、胴部に斜縄文が施されるもの等がある。口頸部文様帯と胴部で同一の原体を使用し、回転方向を変化させ口頸部文様帯としているものもあるが、口頸部文様帯に結節回転文が施文されるものが主体であると思われる。



第15図 円筒下層a式土器

器形

器形は口頸部文様帯付近でわずかに外反するものと、外反せずに垂直に立ち上がるものがある。

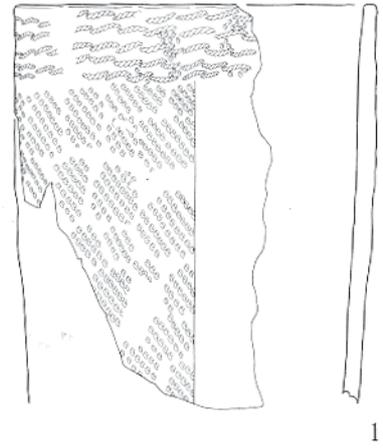
海綿骨針

胎土は砂粒を多く含み、海綿骨針が認められないものが多い。多くの個体は内面調整が認められない。

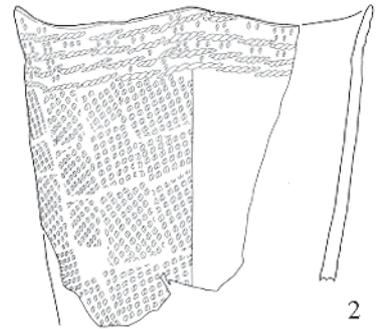
いずれも2~4個の小波あるいは突起を有すると思われるが、突起が3個のものも存在している。

口頸部文様帯がないものは、第15図1の1点であり、LR単節の斜縄文が施文される。口頸部文様帯を有するものの胴部文様には、第16図3を除き複節の斜縄文・縦走縄文の両方が施文され、口頸部文様帯と口頸部の形状には相関は認められない。これらは地縄文が施文された後に結節回転文を施している。

底部まで復元されたものは第16図3の1点であり、底部にも胴部文様と同様に施文される。地文に無節のLを回転施文した後、結節回転文が施される。



1



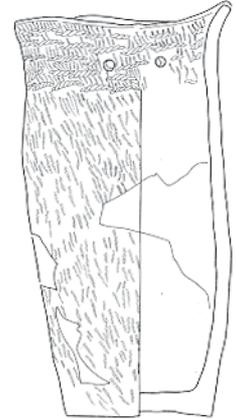
2



4



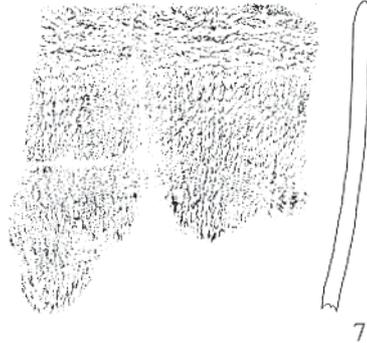
5



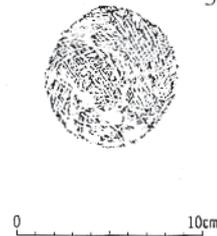
3



6



7



0 10cm

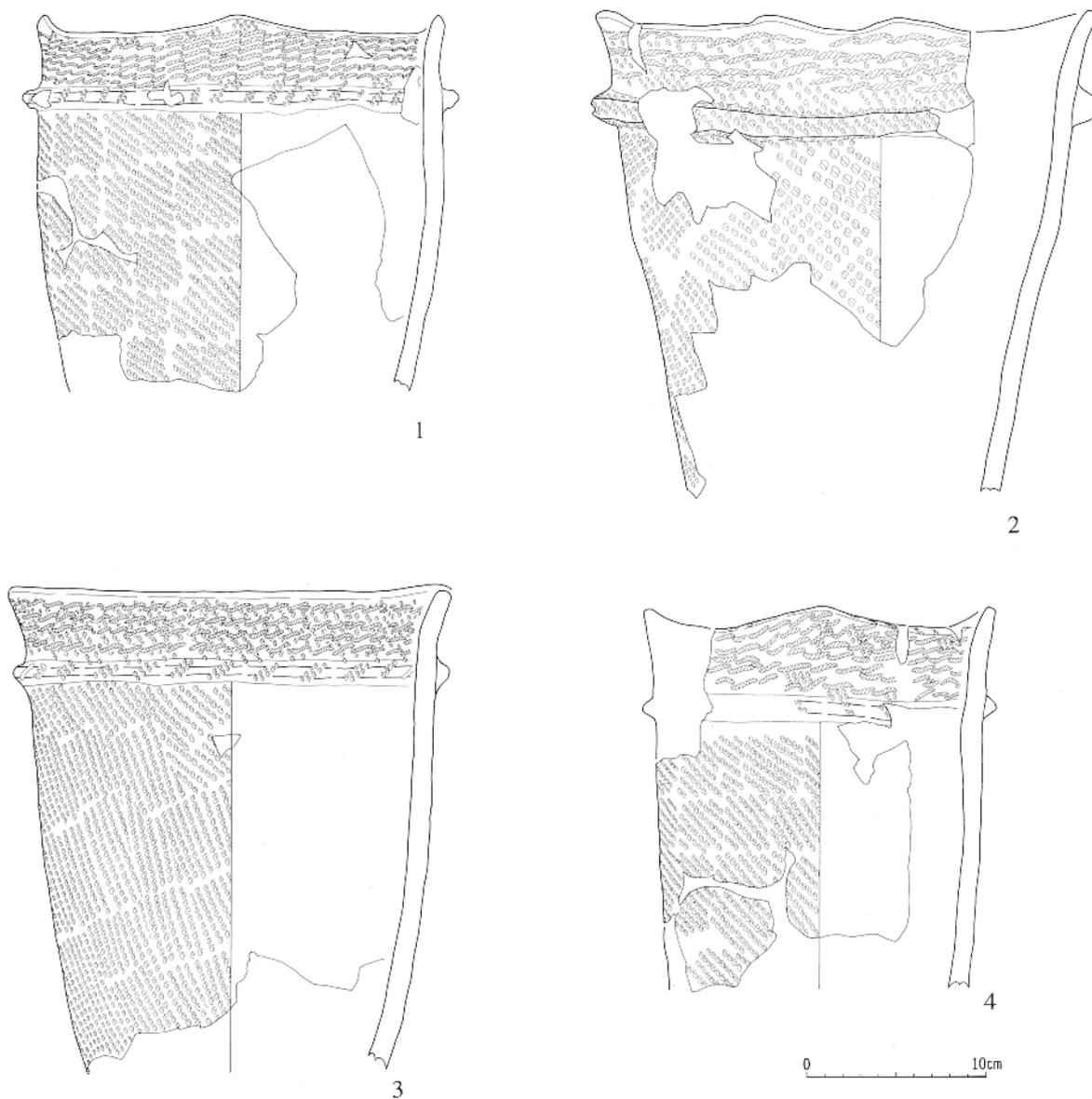
第16図 円筒下層a式土器

円筒下層b式土器は、底部まで復元されたものは無いが、いずれも口頸部文様帯は狭いものと思われる。口頸部文様帯にはいずれも結節回転文が、胴部には複節の斜縄文・縦走縄文が施文される。復元されたものの胴部文様では斜縄文のものが多い。内面調整が施され、平滑化されているものも少なからず存在する。隆帯には原体押圧のもの、指頭押圧のもの、棒状の工具による刺突が施されるものが存在するが、原体押圧のものも多く認められる。また、胴部に用いた原体を隆帯に施文するものもある。

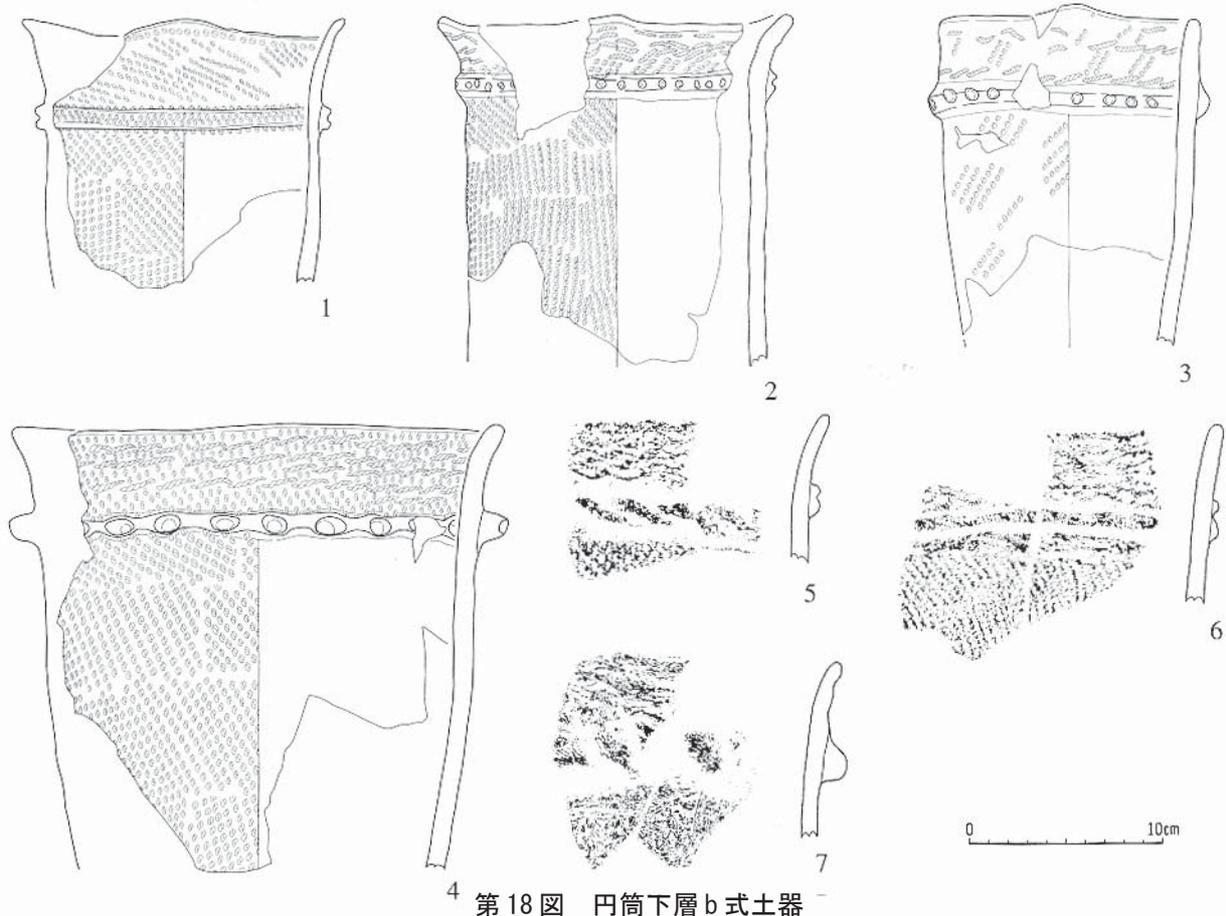
円筒下層
b式土器

隆帯の施文

結節回転文・地縄文は隆帯貼り付け後に施文されている。復元率が低いものが多いが、口縁部は平縁あるいは2または4個の突起を有すると思われるものが多い。器形は円筒下層a式同様に、口頸部付近でやや外反するもの、外反せずに直立するものの2者が存在する。



第17図 円筒下層b式土器



4 第18図 円筒下層b式土器

2. 面型

近世以降の遺物

第19図は面型と思われる。遺物包含層上位の攪乱土層中より出土したため、明確な時期については不明であるが、近世、江戸時代後期以降のものと思われる。獅子舞の獅子頭の像である。眉・眉間・目玉・歯等はシャープであるため、粘土を削り貫いたものではなく、木型を先に作りそれに粘土を押し当て形作ったものと思われる。

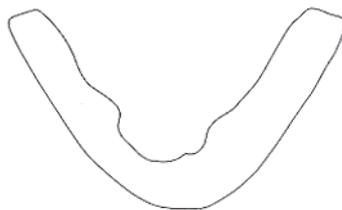
内外面調整

主体的な内面調整は指頭による調整で、口縁部周辺は横方向、上側口縁部から眉間にかけては、底部方向へ向かう縦方向の調整である。

外面は指により押し当てられたと思われる痕跡を多く有する。それ以外ではヘラ状の工具によると思われるナデが、両側面に施される。重量は183gである。



写真17 面型



0 5cm

第19図 面型

2. 石器 石器は、剥片石器では石鏃・石槍・石錐・石篋・石匙・不定形石器等、礫石器では磨製石斧・半円状扁平打製石器・敲磨器類等が出土している。出土量はダンボール箱換算で4箱である。

出土石器

石質は剥片石器では珪質頁岩・頁岩、礫石器では石英安山岩が多く用いられている。



写真18 石鏃・石槍

珪質頁岩器に用いられている珪質頁岩・頁岩には、色調や触感においてこれまで本遺跡周辺の遺跡より出土した同様の石質のものに比べて異なる様相を呈するものも少量ながら出土していることや、一部の剥片石器に緑色細粒凝灰岩が用いられていることなどが、本遺跡より出土した剥片石器の一つの特徴として挙げられる。



写真19 石槍出土状況 (W→)

石鏃は5点出土している。いずれも最大計測値が30mm内外のものであり、器厚の最大幅は3mm程度と比較的薄手である。図示したもののほか、調整が縁辺部にのみ施されるもの、主要剥離面側に調整が施されないもの、また主要剥離面側のバルブ及びリングによる凹凸が除去されていないなど調整が若干粗いものが目立つ。石質は第20図2が緑色細粒凝灰岩・他は珪質頁岩である。

石鏃・石槍

粗い調整

石槍は4点出土しており、両面に丁寧な調整が施される。石質は珪質頁岩のものが3点、頁岩が1点である。

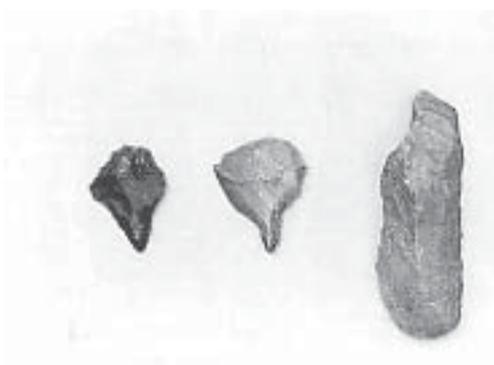
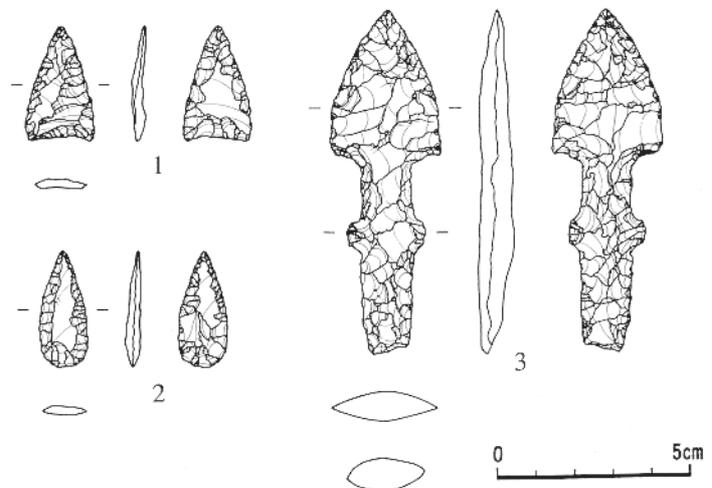


写真20 石錐・石篋



第20図 石鏃・石槍

石匙

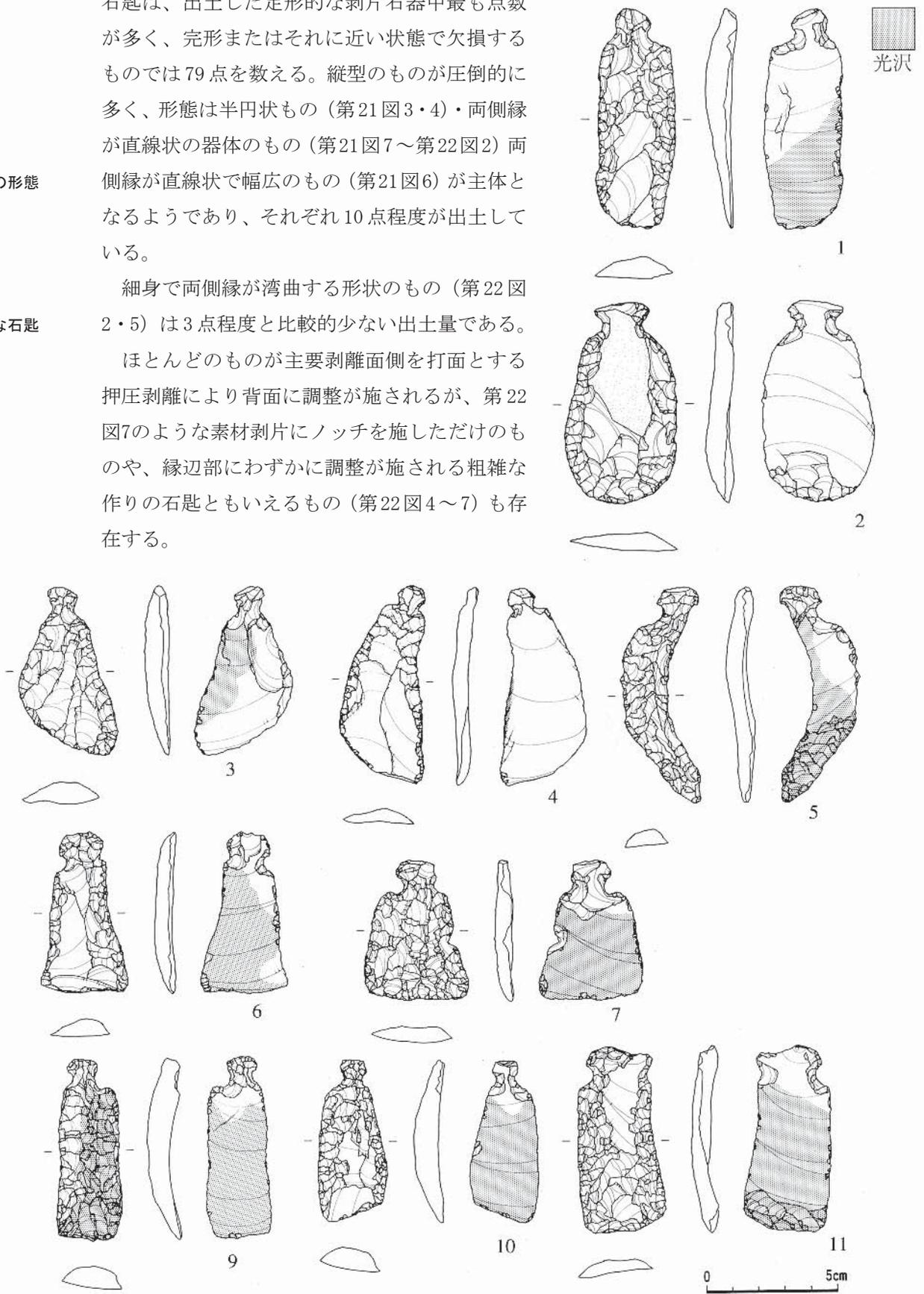
石匙は、出土した定形的な剥片石器中最も点数が多く、完形またはそれに近い状態で欠損するものでは79点を数える。縦型のものが多いが、形態は半円状もの（第21図3・4）・両側縁が直線状の器体もの（第21図7～第22図2）両側縁が直線状で幅広のもの（第21図6）が主体となるようであり、それぞれ10点程度が出土している。

石匙の形態

細身で両側縁が湾曲する形状のもの（第22図2・5）は3点程度と比較的少ない出土量である。

粗雑な石匙

ほとんどのものが主要剥離面側を打面とする押圧剥離により背面に調整が施されるが、第22図7のような素材剥片にノッチを施しただけのものや、縁辺部にわずかに調整が施される粗雑な作りの石匙ともいえるもの（第22図4～7）も存在する。



第21図 石匙

光沢は79点中62点に認められる。

光沢の強度には個体により差異があるが、いずれの形態のものにも普遍的に認められ、第21図6のような直線状で幅広の形態のものや、側面観が主要剥離面倒に湾曲するものに多く現れるようである。

半円状のもの、両側縁が直線状のものにも光沢は認められるが、強度の強いものはあまり認められない。また粗雑な調整のものには光沢は認められない。

光沢の出現傾向

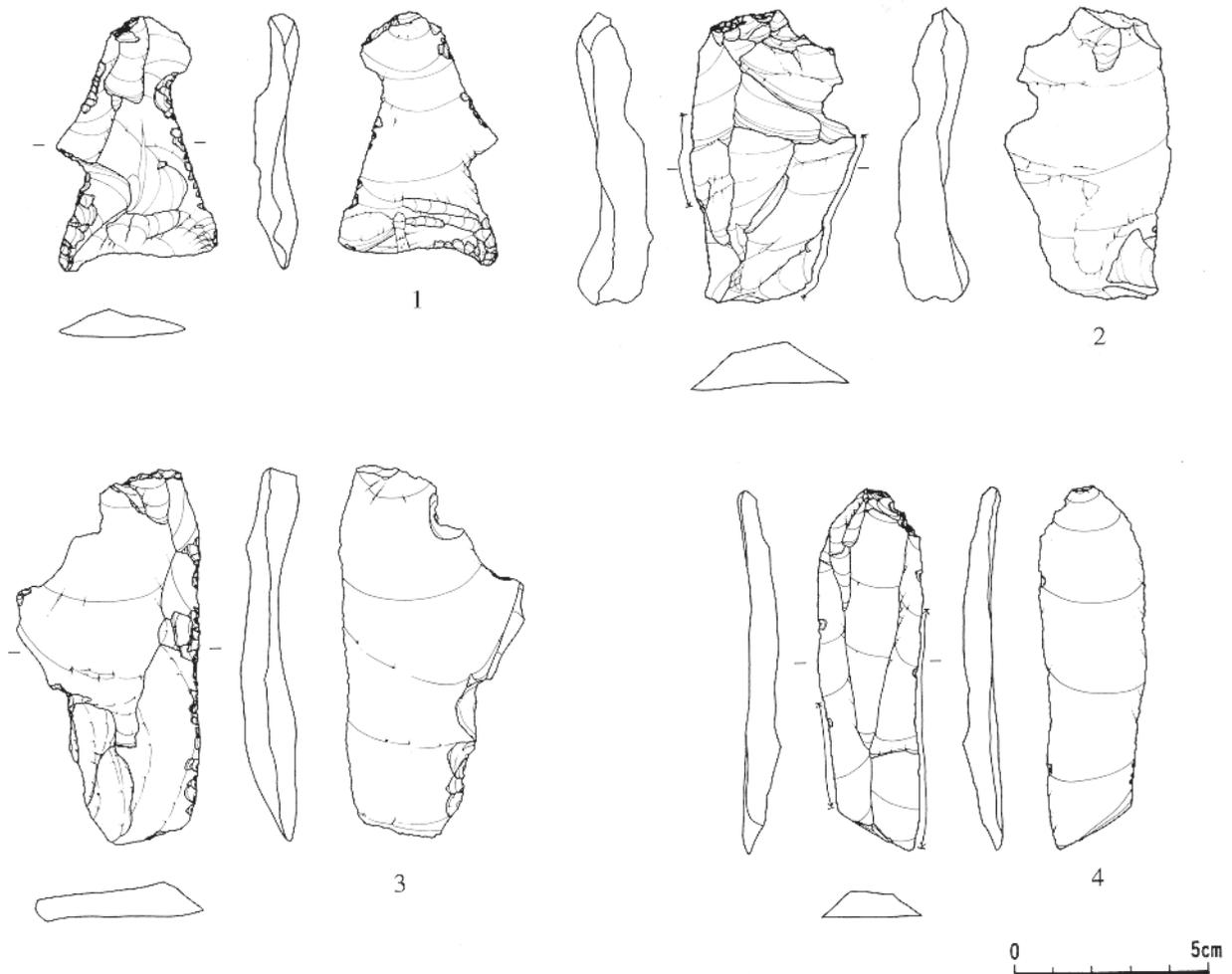


第22図 石匙

その他の
剥片石器

第23図～24図は微細な剥離を有する剥片、所謂Uフレイクと呼称されるものやRフレイクである。

当該時期の石匙に光沢が認められる傾向はこれまでに多くされてきた。今回の調査でも先に記したように、主要剥離面に光沢が認められる石匙が高い出現率で確認されている。今回図示した石匙と類似する形状あるいは石匙の側縁と類似する側縁を有するUフレイク・Rフレイクについて、石匙に残される使用痕との比較のため光沢の有無を、超音波洗浄機で洗浄後に肉眼により観察した。



第23図 Rフレイク・Uフレイク

円筒土器
期の石匙

平成3年・4年度に青森県教育委員会が発掘調査を実施した川内町熊ヶ平遺跡では、円筒下層b～d₂式土器の遺物包含ブロックを検出し、総数492点の石匙が出土している。

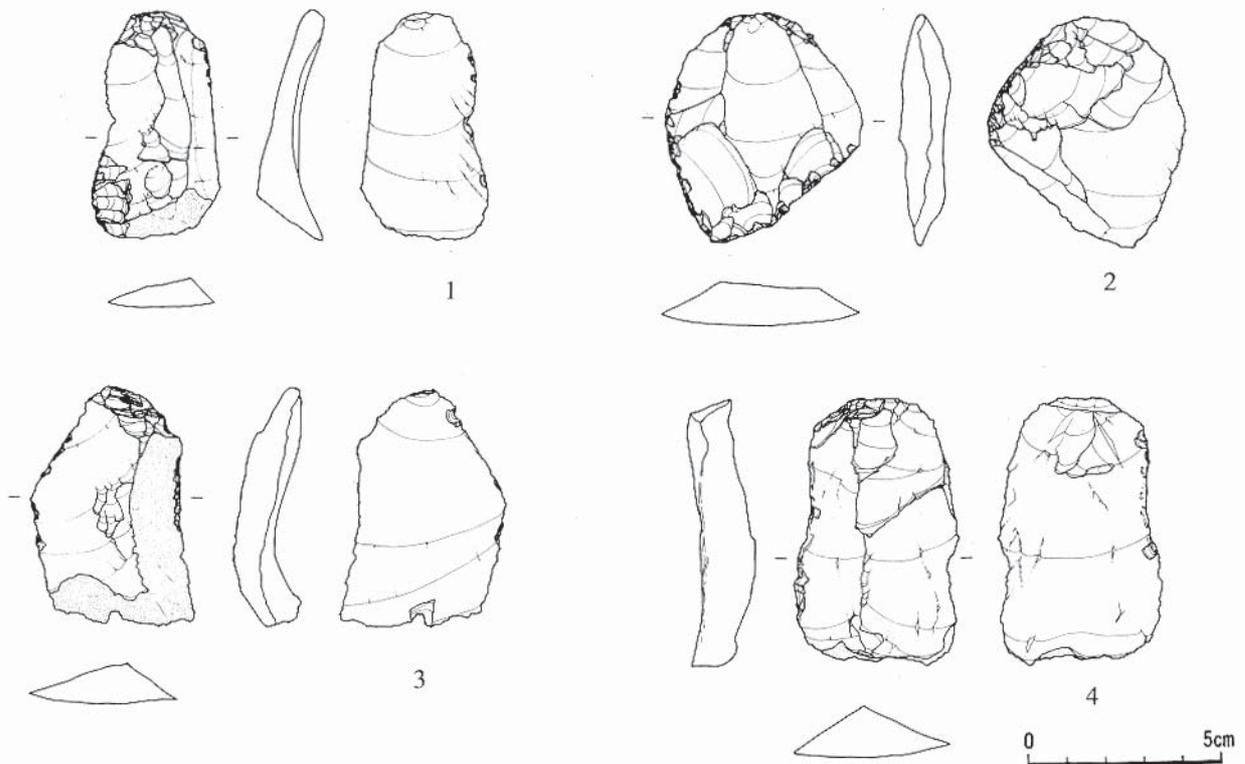
報告では、これらの資料をもとに石匙のつまみのくびれ部分に光沢が認められないこと、つまみ部分にアスファルトが付着する出土例がないこと等から、つまみ部分に紐を懸けた状態での石匙の使用法を想定している（青森県教育委員会1995）。

今年度の報告分については、石匙のつまみ部分が果たした機能の内容は問わずに、剥片剥離作業時に偶発的につまみ部分と同様の形状のくびれを有する結果となったと考えられる、図示した資料のようなものを選択し、つまみ部分が意図的に作出されなくとも形状的に石匙と類似するものにも、石匙に認められるような光沢を有するか確認したが、光沢を認めることができた資料は無かった。くびれ部分を有さずに調整剥離や微細な剥離を有するものでも同様の結果であった。

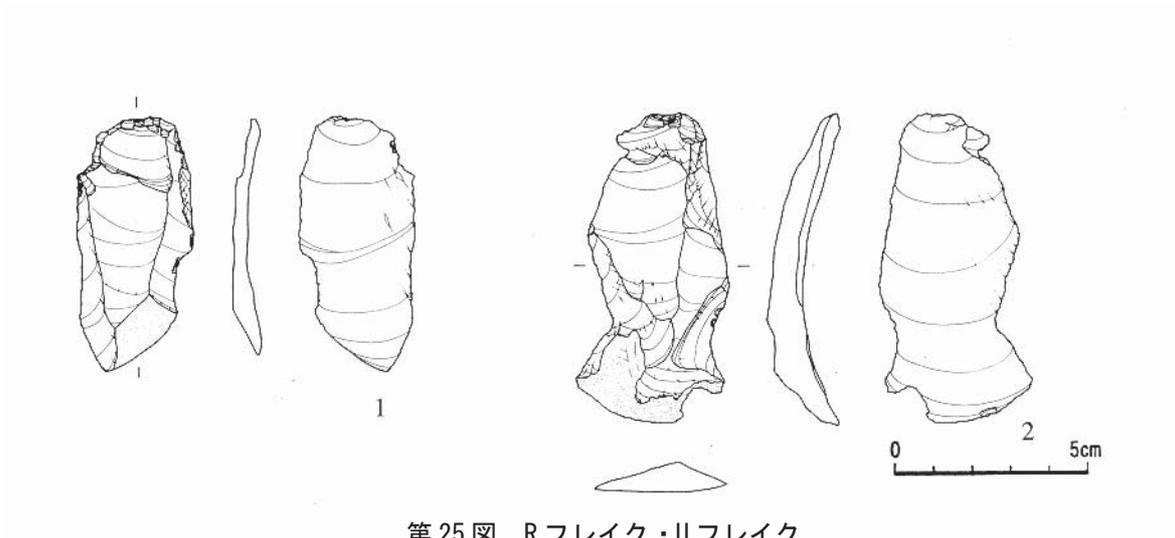
第23図2のように、器体に層理が多く入り器面の凹凸が激しい現状で、または今後の調整でも求める形状を得る可能性が低いと思われるものや、第23図3のように平坦な器体であるが、器体下部に泥岩質の部分を多く有し鋭利な側縁を有さないものも存在するが、これらは側縁に連続する微細な剥離を有し、利器として使用された可能性が窺える資料である。反面第23図4のような鋭利な側縁と平坦な器面の、微細な剥離を連続して有する縦長剥片も存在している。

今回は十分な観察を行っていないが、石匙が有する光沢と同様な光沢を有する資料が認められなかったことは、石匙の持っていた機能と形状に密接な関連があり、それが必然的であったことを逆説的に想起させ得るものであり、すべての不定形な石器が同様であったとは考えられないが、これらの資料は、石匙とは別の用途に用いられる機会が高かったと思われる。

図示した不定形な剥片石器中では、光沢が認められたものはなかったが、第3図3は左側面の稜が溶けた様に摩滅を受けている。それに伴い表裏面の微細な剥離の稜も摩滅を受けている。



第24図 Rフレイク・Uフレイク



第25図 Rフレイク・Uフレイク

礫石器

礫石器は点数が少ない。

敲磨器類は、石英安山岩を用いているものが多く、側面の敲打痕が連続する剥離を伴うものが見受けられる。

出土した磨製石斧はいずれも刃部を欠損する。すべて擦切りにより製作されている。第26図1の石質は、緑色細粒凝灰岩である。

写真の半円状扁平打製石器は最大計測値82mmと、本類に分類されるものでは小型である。周縁に施される調整剥離と底面の磨りにより本類に分類した。石質は石英安山岩である。

註：石器の石質鑑定については、調査員工藤一彌氏にご教示を賜った。

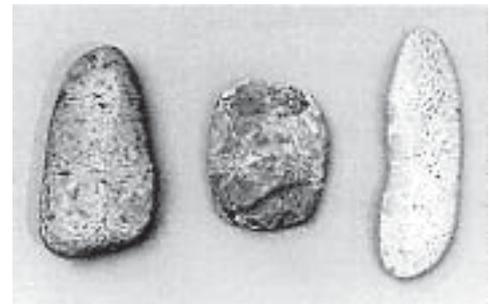


写真21 敲石・凹石

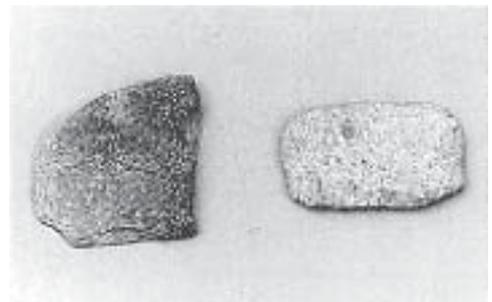
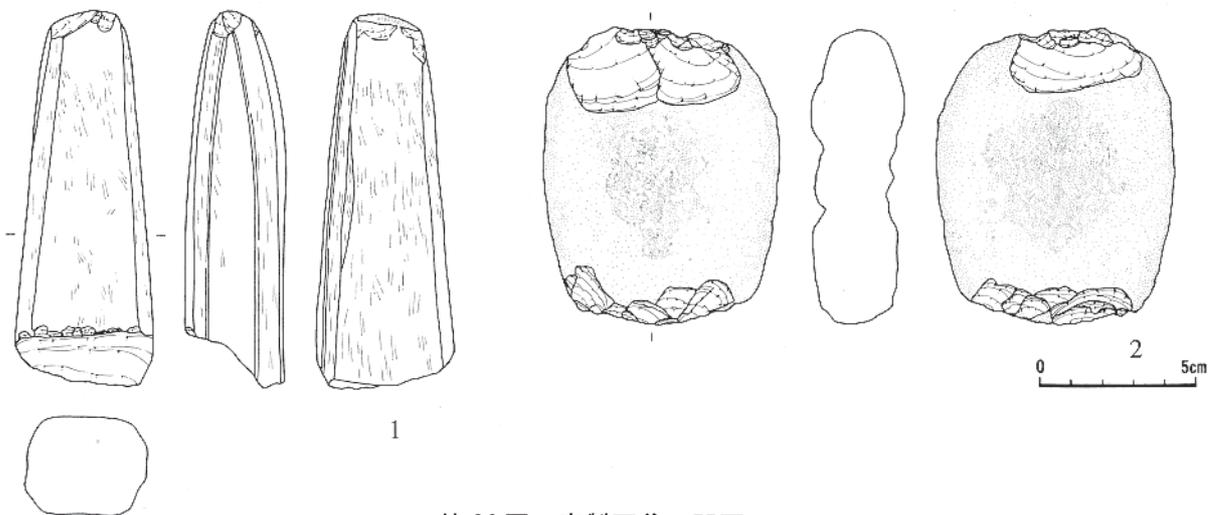


写真22 半円状扁平打製石器



第26図 磨製石斧・凹石

第Ⅱ章 小 結

青森市建設部道路課委託の発掘調査では、遺跡範囲内をほぼ南北に縦走する工事用道路東側と、南側の八甲田火山性台地上の丘陵地となる部分の調査を実施した。

調査にあたっては、横内川多目的遊水地建設事業との調整を図ったため、今年度は調査対象面積6,000m²に対して調査可能であった1,000m²の調査を実施した。

調査区域は地形的に、工事用道路東側の青森平野に相当する部分、八甲田火山性台地を基盤とする丘陵地部分の2つの地形に大別できる。調査区域内の現況は、平野部分はススキ等が繁茂する草地、丘陵地部分では南側に墓所を控え、一面に碎石が敷き詰められ、過去に造成が行われたと思われる地形であった。

遺構は、このような調査区域内の地形から、フラスコ状土坑・Tピット・溝状遺構・円筒下層a・b式期の遺物集中ブロックが各1基ずつ検出した。フラスコ状土坑・Tピットは丘陵地上から、溝状遺構・遺物集中ブロックは平野部分からの検出であった。丘陵地上から検出した遺構の帰属時期は不明であるが、溝状遺構については遺物を伴わないため明確な帰属時期を特定し得ないが、漸位層に相当する基本層序第Ⅳ層を掘り込み面としていることから、少なくとも縄文時代前期初頭以前に帰属するものと考えられる。

遺物は、丘陵地上からは主に縄文時代中期末～後期初頭に帰属する土器が出土したが、今年度の調査により出土した遺物で主体となるものは第1号遺物集中ブロックより出土した円筒下層a・b式土器である。ダンボール換算で44箱の出土量であった。第1号遺物集中ブロック北側からは同時期の土器がまったく出土していない出土状況から、今回検出した部分は本遺構縁辺部に相当するとみられ、遺物包含層の層厚は30～50cmである。

復元を試みた土器は、総出土土器量の約3分の1の量であるが、円筒下層a・b式両形式を通じ口頸部文様帯には結節回転文が施されるものが圧倒的に多く認められる。

土器以外の遺物では、主に剥片石器・礫石器がダンボールで4箱出土した。特に使用によるものと思われる光沢を有する石匙が多く出土しており、また、出土点数は少ないが半円状扁平打製石器も出土していること等、当該時期の他遺跡の出土遺物と同様な傾向を呈する出土状況である。

発掘調査は、本発掘調査区域西側に隣接する、縄文時代前期初頭の竪穴式住居跡を検出した試掘調査成果を併せ、平成12年度は竪穴式住居跡・溝状遺構を検出した周辺と、第1号遺物集中ブロック南側の調査を実施する予定である。

(沼宮内陽一郎)

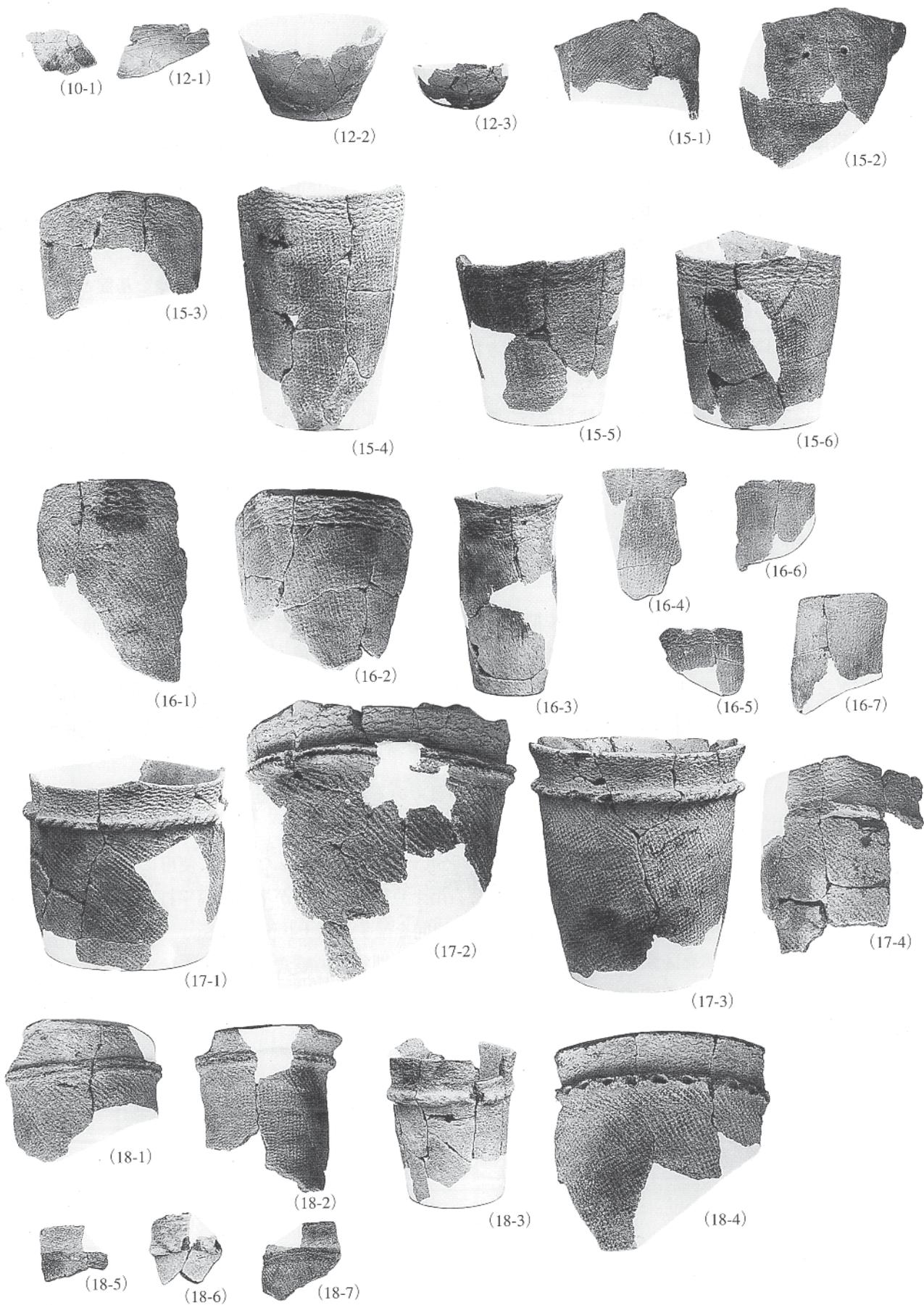


写真 23 南側地区出土土器・円筒下層 a 式・b 式土器

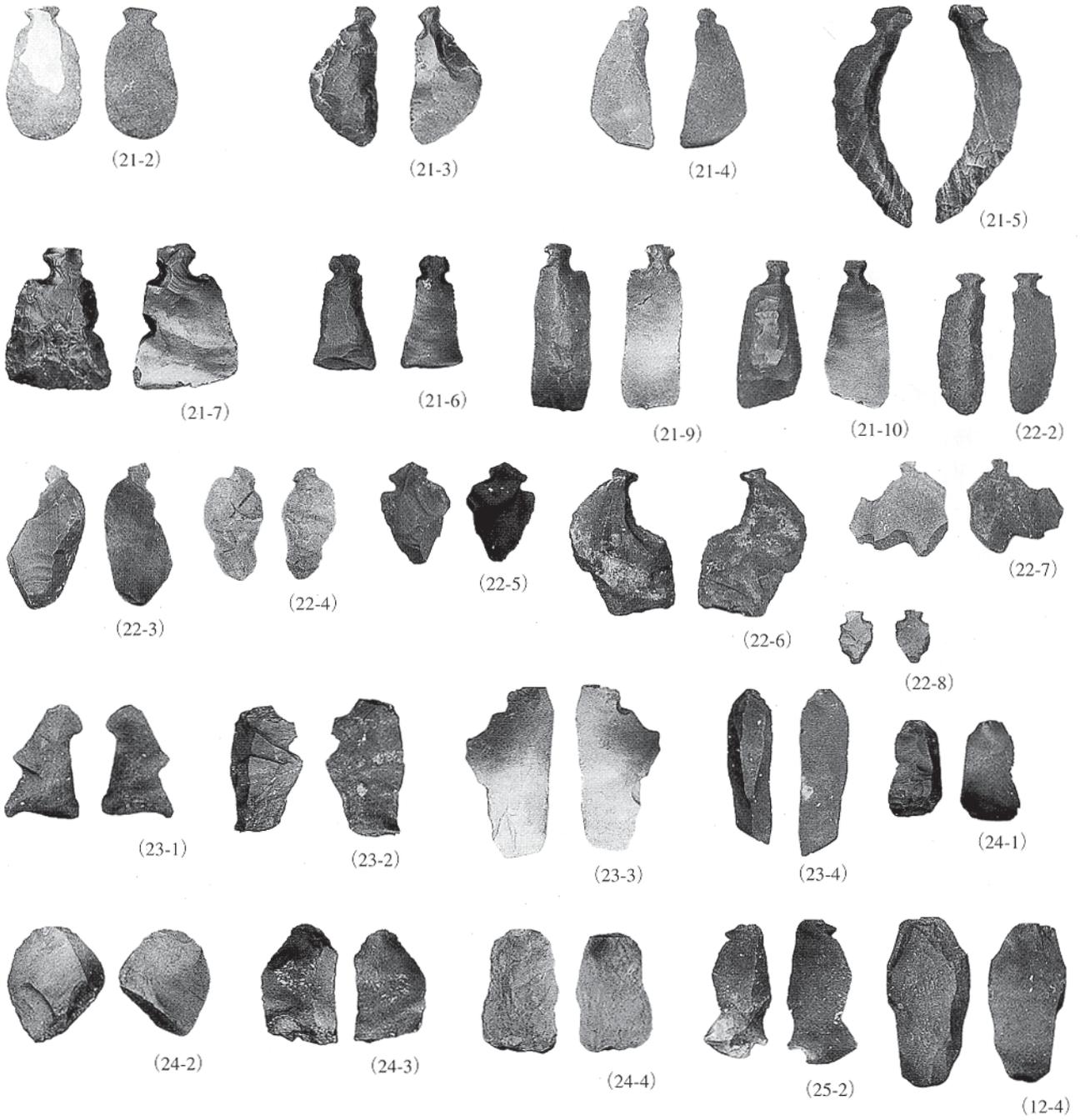


写真24 石匙・Rクレイフ・Uクレイフ

ま と め

本遺跡は、縄文時代早期前半から後期初頭までの遺跡である。平成10年度に青森県教育委員会により、堤川広域基幹河川改修事業に先立つ発掘調査が実施され、貝殻腹縁文を有する縄文時代早期前半と思われる土器片、縄文時代前期初頭に帰属すると思われる土坑5基及び、20,000～25,000年前に形成されたと考えられる埋没樹を埋積する河川跡を検出している。5基の土坑は、出土遺物から表館式期に帰属し、その機能は土坑墓の可能性が考えられ、貝殻腹縁文を有する土器片は河川跡より出土している。

今年度当委員会が実施した調査は、堤川広域基幹河川改修事業に先立つ試掘調査が、調査対象面積2,000㎡に対して250㎡、市道筒井幸畑団地線特殊改良事業一種（特定）事業に先立つ発掘調査においては、調査対象面積6,000㎡に対して1,000㎡の発掘調査であった。

本遺跡は地形的に丘陵地、平野部に区分され、地質的には、丘陵地は降下火山灰、平野部は砂層、丘陵地と平野部の境界は田代溶結凝灰岩を基盤としている。

調査により、竪穴式住居跡1軒、土坑・Tピット・遺物集中ブロックを各1基、溝状遺構を1条検出し、縄文時代の河川跡の断面を確認した。竪穴式住居跡・河川跡は試掘調査範囲から、土坑・Tピット・溝状遺構・遺物集中ブロックは発掘調査範囲からの検出であった。

土坑・Tピットは田代平溶結凝灰岩を基盤とする丘陵地、竪穴式住居跡・溝状遺構は砂層を基盤とする平野部から、遺物集中ブロックは、丘陵地と平野部の境界からの検出である。竪穴式住居跡は縄文時代前期初頭に帰属すると思われる、遺物集中ブロックは縄文時代前期中頃に形成されている。土坑・Tピットは帰属時期は不明であるが、周辺からは縄文時代中期末～後期初頭と思われる遺物が出土している。

遺物は、両調査区よりダンボール換算で51箱が出土した。竪穴式住居跡及びその周辺の、竪穴式住居跡と掘り込み面を同じくする基本層序第Ⅺ・Ⅻ層より表館式土器、早稲田6類土器が、ダンボール換算で約1箱弱出土している。遺物集中ブロックの堆積土は、円筒下層a・b式土器を包含し、ダンボール50箱弱の遺物が出土した。また、河川跡の埋積土においても多量の円筒下層a・b式土器を確認した。

竪穴式住居跡から西方約200mには、青森県教育委員会の調査により検出した土坑群が存在し、本住居跡と土坑群が近接または同時期に存在していた可能性が考えられる。

竪穴式住居跡は試掘調査の性格上から未精査部分を残し、今回の調査では遺構内及び遺構周辺より、当時の生業等を示唆し得る遺物の出土は無い。しかしながらこれまで本市において、三内丸山遺跡・熊沢遺跡等前期中頃以降の遺物・遺構を多量に検出する遺跡は多数存在するが、縄文時代前期中頃以前に帰属すると明確に判断できる遺構の検出はない。これまで、また今後の本遺跡の調査による円筒土器出現前の営為をみることは、その後続く円筒土器を伴う集落跡形成までの過程を考察できよう。

遺物集中ブロックは、遺構の縁辺部に相当すると考えられることなどから、出土土器型式には層位別の差異は認められなかった。

今回の発掘調査概要においては、総出土土器の約3分の1を対象として報告しているため、今後の出土資料の増加による変動は考慮されるが、復元された土器の口頸部文様帯には結節回転文、胴部には複節の斜縄文・縦走縄文が施文されるものが多く認められる。

遺物集中ブロック西方約30mに露出する河川跡の埋積土より、遺物集中ブロックと同じく円筒下層a・b式土器が出土している。遺物集中ブロックより出土した土器には摩滅したものが認められないが、

河川跡より出土するものはいずれも摩滅したものであることから、遺物集中ブロックの土器が流れ込んだものと考えられる。

平成10年度に青森県教育委員会により河川跡は、第26図のように遊水地を南北に縦走する本流筋と南東方向にあたる、試掘調査により確認した支流が合流する可能性があるとして想定されていた。

今回試掘調査により確認された河川跡は、その支流の延長と平面的には整合性が認めれ、支流跡は、このまま遺物集中ブロックに近接して南東方向への伸びが想定され、埋積土中に包含される摩滅した円筒土器もこれを端的に裏付ける。

しかし、試掘調査範囲である遊水地東側法面に露出する層序の観察では、河川跡よりさらに北側においても、法面に露出する河川跡の基盤となる田代平溶結凝灰岩層が確認された。また、第27図に示されるとおり、遺物集中ブロック北側に隣接するU-86・87グリッド断面においては、河川跡と同様の堆積を呈することが確認されていることから、第1号遺物集中ブロック北側においても過去何らかの小河川が流路をとっていた可能性が考えられる。

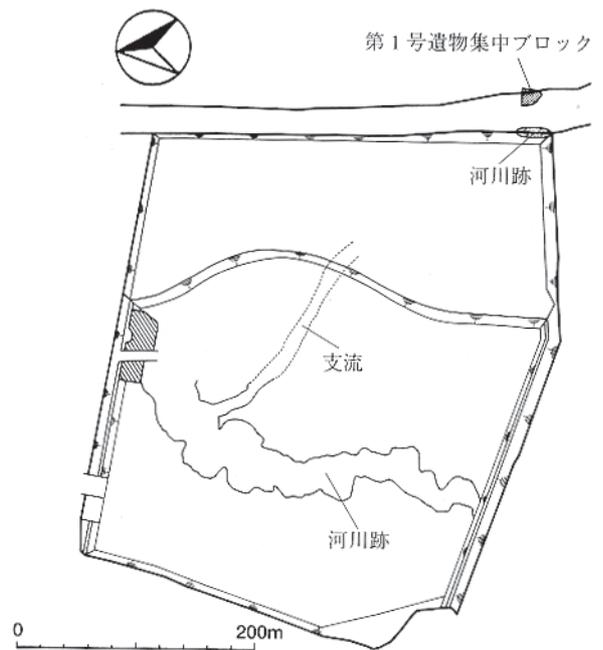
仮に平成10年度に確認された支流跡と、今回試掘調査において確認された河川跡が同一のものであれば、

遺物集中ブロック北西側に向かい流路をとる支流が遺物集中ブロック北側を流れた後に、遺物集中ブロック西側で、本河川本流方向へ大きく流路を変換させることとなる。これらのことを考慮すると、平成10年度に確認された支流跡は必ずしも、南東方向にのみ延びるものではなく、今回確認された支流断面付近でさらに北東方向へ分かれ、もう一本の支流が存在していた可能性も考えられる。

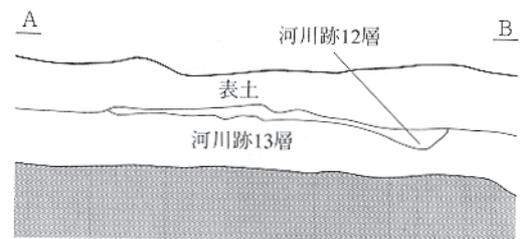
以上のような課題を踏まえながら平成12年度は、発掘調査会議において検討された、今年度の遺構検出状況をもとに、竪穴式住居跡・溝状遺構が検出した周辺及び遺物集中ブロック南側の合計約4,500m²の調査を実施する予定である。

最後となったが、調査から本書刊行に至るまで、ご指導ご協力を賜った多くの方々に改めて感謝の意を表する次第である。

(担当者一同)



第27図



第28図 U-86 セクション

引用・参考文献一覧

- | | | | |
|-----------------|------|-------|---|
| 青森県教育委員会 | 1978 | 第38集 | 『熊沢遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 1980 | 第56集 | 『永野遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 1981 | 第67集 | 『発茶沢遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 1982 | 第73集 | 『鴨平(2)遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 1983 | 第82集 | 『和野前山遺跡』 |
| 〃 | 1985 | 第90集 | 『大石平遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 1985 | 第91集 | 『表館遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 |
| 〃 | 1993 | 第154集 | 『小奥戸(1)遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 1996 | 第205集 | 『三内丸山遺Ⅳ』 |
| 〃 | 1996 | 第187集 | 『畑内遺跡Ⅲ』 |
| 〃 | 1999 | 第262集 | 『畑内遺跡Ⅴ』 |
| 〃 | 1999 | 第263集 | 『櫛引遺跡』 |
| 〃 | 1999 | 第267集 | 『青森県遺跡詳細分布調査報告書XⅠ』 |
| 〃 | 1999 | 第270集 | 『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査報告書』 |
| 青森市教育委員会 | 1965 | 2 | 『四ッ石遺跡調査概報』 |
| 〃 | 1979 | | 『蛭沢遺跡』 |
| 〃 | 1986 | | 『田茂木野遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 1987 | | 『横内城跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 1995 | 第24集 | 『横内・横内(2)遺跡発掘調査報告書』 |
| 〃 | 1999 | 第46集 | 『新町野・野木遺跡発掘調査概報』 |
| 階上町教育委員会 | 1989 | | 『白座遺跡・野場(3)遺跡発掘調査報告書』 |
| 盛岡市教育委員会 | 1986 | | 『大館遺跡群 一昭和60年度発掘調査概報一』 |
| 佐藤達夫、二本柳正一、角鹿扇三 | 1958 | | 「青森県上北郡早稲田貝塚」『考古学雑誌』第43巻2号 |
| 佐藤達夫、渡辺兼庸 | 1961 | | 「六ヶ所村表館出土の土器」『上北考古学会誌』2 |
| 名久井文明 | 1971 | | 「青森県芦野遺跡の土器群について」『考古学雑誌』第57巻2号 |
| 工藤 竹久 | 1989 | | 「縄文尖底系土器様式」『縄文土器大観』1 |
| 鈴木 克彦 | 1996 | | 「円筒下層式土器」『日本土器事典』雄山閣 |
| 三宅 徹也 | 1981 | | 「円筒土器」『縄文文化の研究』3 雄山閣 |
| 三宅 徹也 | 1977 | | 「円筒土器の再検討」『調査研究年報』青森県立郷土館 |
| 三宅 徹也 | 1989 | | 「円筒土器下層様式」『縄文土器大観』1 小学館 |
| 村越 潔 | 1984 | | 『増補 円筒土器文化』雄山閣 |
| 武藤 康弘 | 1989 | | 「東北地方北部の縄文前期土器群の編年学的研究—表館式、早稲田6類土器をめぐって—」『考古学雑誌』第74巻第2号 |
| 松井かおる | 1991 | | 「型抜き遊びについて—遺跡出土メンガタから現代のカタまで—」『江戸在
地系土器の研究』Ⅰ |

報 告 書 抄 録

ふ り が な	おおやざわのだかつこいちいせきちょうさほうこくしょ							
書 名	大矢沢野田（1）遺跡調査報告書							
副 書 名								
巻 次								
シ リ ー ズ 名	青森市埋蔵文化財調査報告書							
シ リ ー ズ 番 号	第52集							
編 著 者 名	設楽政健、沼宮内陽一郎							
編 集 機 関	青森市教育委員会							
所 在 地	〒030-8555 青森県青森市中央一丁目22-5 TEL 017-734-1111							
発 行 年 月 日	西暦2000年3月25日							
ふ り が な	ふ り が な	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調 査 原 因
所 収 遺 跡 名	所 在 地	市町村	遺跡番号					
おおやざわのだかつこいち 大 矢 沢 野 田 (1)	あおもりしおおあざ 青森市大字	02201	292	40°	140°	19990614	250	遊水地建設(堤 川広域基幹河 川改修事業)に 伴う試掘調査
	おおやざわあざのだ 大矢沢字野田			47′	39′	}		
	ほか			30″	77″	19990709		
おおやざわのだかつこいち 大 矢 沢 野 田 (1)	あおもりしおおあざ 青森市大字	02201	292	40°	140°	19990614	1,000	道路建設(市道 筒井幸畑団地 線特殊改良事 業一種(特定) 事業に伴う発 掘調査
	おおやざわあざのだ 大矢沢字野田			47′	39′	}		
	ほか			30″	77″	19990709		
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特記事項	
おおやざわのだかつこいち 大 矢 沢 野 田 (1)	集落跡	縄 文	竪穴住居跡 1軒 土坑 1基 Tピット 1基 溝状遺構 1基 遺物集中ブロック 1基 河川跡 1基	縄文式土器 石器	縄文時代前期 初頭の竪穴式 住居跡と、円 筒下層a式・ b式土器を多 量に包含する 河川跡			

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962	『三内霊園遺跡調査概報』
〃	2	1965	『四ツ石遺跡調査概報』
〃	3	1967	『玉清水遺跡調査概報』
〃	4	1970	『三内丸山遺跡調査概報』
〃	5	1971	『野木和遺跡調査報告書』
〃	6	1971	『玉清水Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
〃	7	1971	『大浦遺跡調査報告書』
〃	8	1973	『孫内遺跡発掘調査報告書』
		1979	『蛭沢遺跡』
		1983	『四戸橋遺跡調査報告書』
青森市の埋蔵文化財		1983	『山野峠遺跡』
〃		1985	『長森遺跡発掘調査報告書』
〃		1986	『田茂木野遺跡発掘調査報告書』
〃		1987	『横内城跡発掘調査報告書』
〃		1988	『三内丸山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書第16集		1991	『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』
〃	第17集	1992	『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』
〃	第18集	1993	『三内丸山(2)遺跡発掘調査概報』
〃	第19集	1993	『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第20集	1993	『小牧野遺跡発掘調査概報』
〃	第21集	1994	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第22集	1994	『小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第23集	1994	『三内丸山(2)・小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第24集	1995	『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第25集	1995	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第26集	1995	『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第27集	1996	『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』
〃	第28集	1996	『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第29集	1996	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第30集	1996	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
〃	第31集	1997	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第32集	1997	『桜峯(1)遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第33集	1997	『新町野遺跡試掘調査報告書』
〃	第34集	1997	『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第35集	1997	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第36集	1998	『桜峯(1)遺跡発掘調査報告書』
〃	第37集	1998	『新町野遺跡発掘調査報告書』
〃	第38集	1998	『野木遺跡発掘調査報告書』
〃	第39集	1998	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第40集	1998	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
〃	第41集	1998	『野木遺跡発掘調査概報』
〃	第42集	1998	『熊沢遺跡発掘調査概報』
〃	第43集	1999	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第44集	1999	『葛野(2)遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第45集	1999	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
〃	第46集	1999	『新町野・野木遺跡概報』
〃	第47集	1999	『稲山遺跡発掘調査概報』
〃	第48集	2000	『熊沢遺跡発掘調査報告書』
〃	第49集	2000	『稲山遺跡発掘調査既報Ⅱ』
〃	第50集	2000	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
〃	第51集	2000	『桜峯(1)・雲谷山吹(3)遺跡発掘調査報告書』
〃	第52集	2000	『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査報告書』
〃	第53集	2000	『市内遺跡発掘調査報告書』

青森市埋蔵文化財調査報告書 第52集

大矢沢野田(1)遺跡調査報告書

発行年月日 平成 12年 3月 25日

発行 青森市教育委員会

〒030-8555 青森市中央一丁目22-5

TEL 0177-34-1111

印刷 東北印刷工業株式会社

〒030-0902 青森市合浦一丁目2-12

TEL 017-742-2221